

2. 難波野遺跡・難波野条里制遺跡、大垣遺跡・一の宮遺跡平成18・19年度発掘調査報告

1. はじめに

難波野遺跡・難波野条里制遺跡、大垣遺跡・一の宮遺跡は、宮津市大垣、難波野、江尻に所在し、日本三景の一つである天橋立の北側に位置する。今回の発掘調査は、国道178号府中道路新設改良事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。なお、この事業に伴う上記遺跡の発掘調査は、平成14年度から毎年継続的に実施しており、平成19年度で6年間にわたる調査の最終年度を迎える。

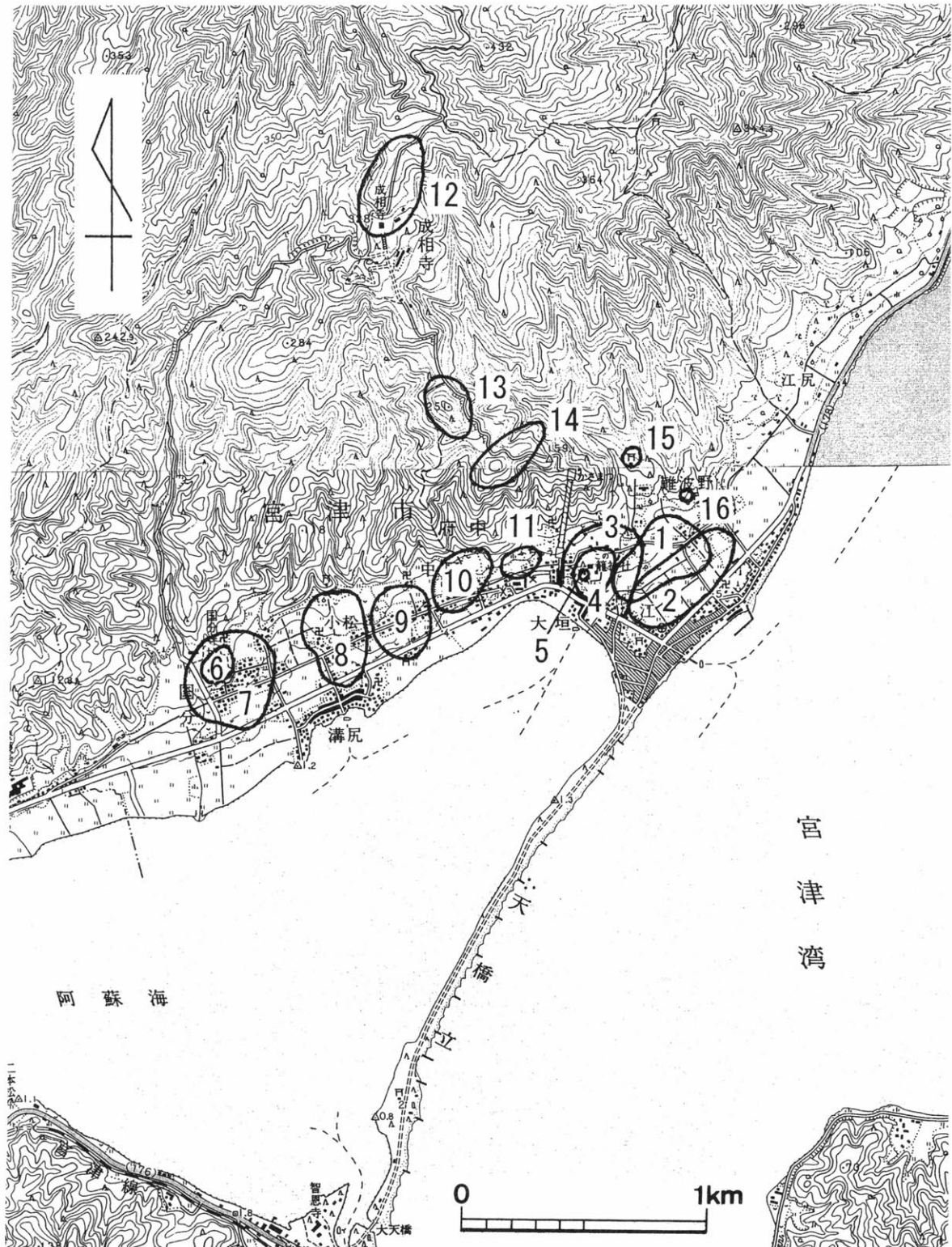
難波野遺跡は、弥生時代から中世にかけての遺跡として知られており、特に、平成17年度には弥生時代中期の方形貼石墓を2基検出した。また、この周辺の現状の地形には碁盤目状の地割りが見られ、籠神社付近に「九条」という地名も残っていることから、条里制に関係する遺跡(難波野条里制遺跡)と考えられている。

大垣遺跡は、籠^{この}神社を中心に古代・中世の土器の出土が、一の宮遺跡は弥生土器の出土が知られている。これまでの調査では、平成15年度の調査で中世の柵列跡や湿地状の落ち込みを確認しており、中世の土器のほか、木製品や漆器が出土している。

平成18年度の調査では、難波野遺跡で前年度検出した弥生時代の方形貼石墓の広がりの中世の集落遺跡の広がり確認、また、大垣・一の宮遺跡では、室町時代の画僧である雪舟の国宝「天橋立図」に描かれている門前町の様子の解明を主な目的として発掘調査を行った。調査の結果、難波野遺跡では、方形貼石墓は確認できなかったが、真名井川に近い低地部分の調査区で、浅瀬に多数の土器などを置いて水辺の祭祀を行ったとみられる古墳時代中期の祭祀遺構を検出した。遺物としては、平安時代後期の年号を記した木簡や中世の残存状態良好な漆絵漆器が注目される。大垣・一の宮遺跡では、中世の溝跡などを検出したが、遺構の分布はまばらであり、出土遺物もわずかであった。この年度の調査を担当したのは、調査第2課調査第3係長石井清司、主任調査員引原茂治、戸原和人、専門調査員石尾政信である。

平成19年度の調査は、古墳時代中期の祭祀遺構の検出や漆絵漆器の出土などの、難波野遺跡における前年度の調査成果を受けて実施した。調査区は、祭祀遺構・漆絵漆器などを検出した調査区の西側に隣接する。調査の結果、古墳時代の顕著な遺構は検出しなかったが、中世の掘立柱建物跡や柵列跡、石積み遺構、井戸跡などを検出し、漆絵漆器などの遺物が多数出土した。この年度の調査を担当したのは調査第2課課長補佐兼調査第3係長石井清司、主任調査員引原茂治である。

調査にあたっては、宮津市教育委員会、京都府教育委員会、京都府立丹後郷土資料館、地元自治会などの関係機関からご協力・ご指導をいただいた。また、多くの方々から専門的なご指導、



1. 難波野遺跡 2. 難波野条里遺跡 3. 大垣遺跡 4. 一の宮遺跡 5. 籠神社経塚 6. 丹後国分寺跡
 7. 国分遺跡 8. 小松遺跡 9. 安国寺遺跡 10. 中野遺跡 11. 慈光寺遺跡 12. 成相寺旧境内
 13. 阿弥陀ヶ峰城跡 14. 今熊野城跡 15. 真名井神社経塚 16. 難波野千躰地藏遺跡

第1図 調査遺跡位置図 (国土地理院 1/25,000 日置・宮津)

ご教示をいただいた。現地調査にあたっては、地元有志の方々に参加していただいた。記して感謝したい。^(注1)なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 位置と環境

難波野遺跡ほかは、北側の成相山系の山地から流下する真名井川などの小河川によって形成された扇状地上および南側の阿蘇海に面した低地に位置する。調査を行った地点は、この扇状地の縁辺部および低地部分にあたる。

調査地は、国府の所在地を示す「府中」と呼ばれる地区に所在する。地区内に丹後国分寺跡なども残り、律令期以後の丹後国の中心地であったことを物語っている。ただ、国府の所在地については、いまだ明らかでない。調査地西側に位置する中野遺跡は、輸入陶磁器の出土点数の多さから有力な候補地として注目されているが、決め手に欠ける。

律令期以前の遺跡としては、まず難波野遺跡があげられる。第3・4次調査で、弥生時代中期の方形貼石墓2基が検出されている。一の宮遺跡は、弥生土器の出土地として知られている。また、西方にやや離れてはいるが、与謝野町岩滝地区にはガラス釧が出土した弥生時代後期の墳丘墓である大風呂南1号墓がある。

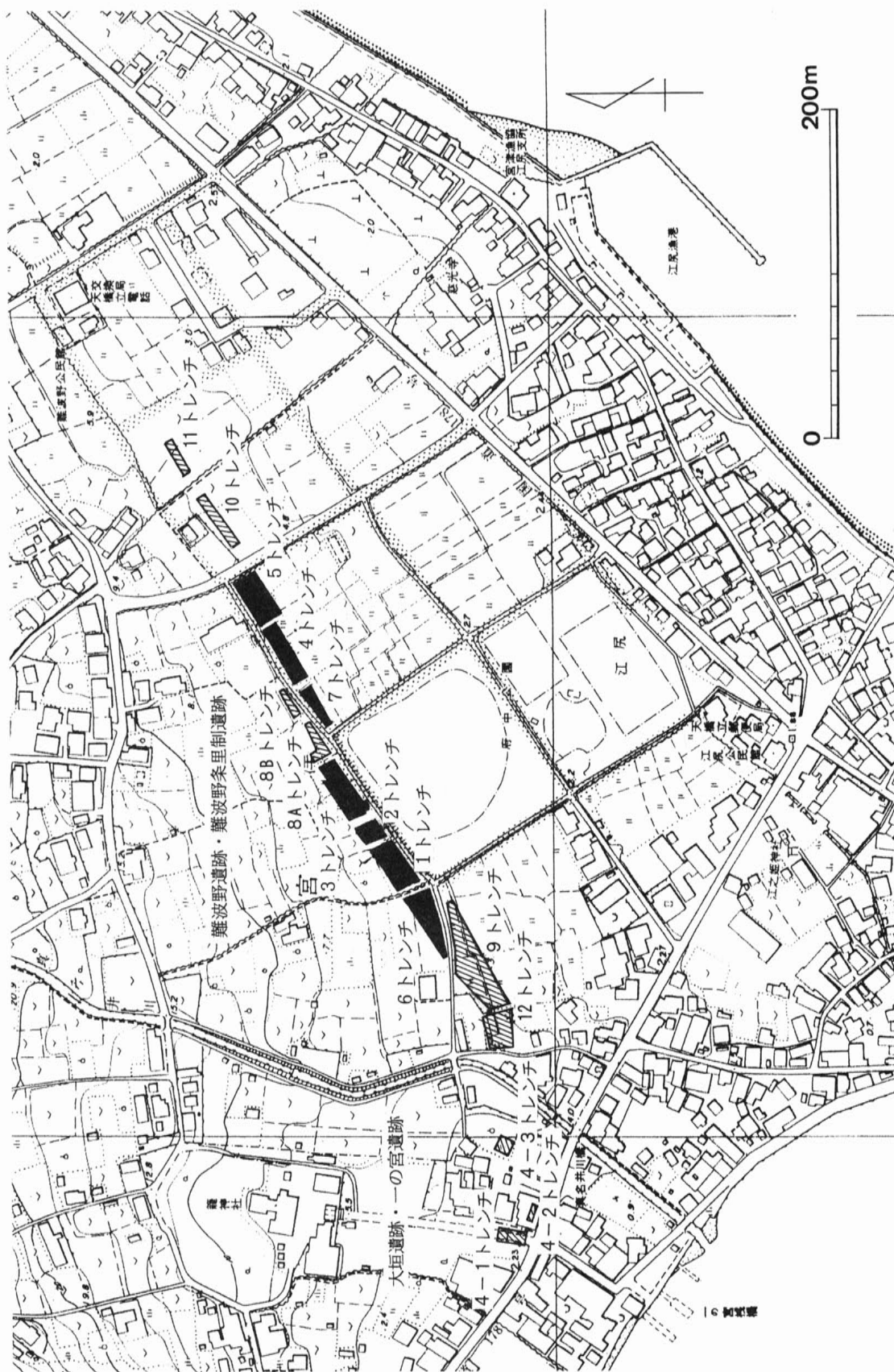
西国三十三所観音霊場第28番札所として親しまれている^{なりあいじ}成相寺は、慶雲四(704)年創建と伝えられる。最近の宮津市教育委員会による成相寺旧境内の調査により、創建が寺伝のように8世紀に遡る可能性が考えられている。成相寺が所在する成相山の麓で、調査地の西側に隣接する所に、丹後一の宮の籠神社がある。国宝海部氏系図や前漢鏡、後漢鏡などを伝えている。境内には12世紀後期の経筒などが出土した籠神社経塚がある。また、平成19年6月には、神社の鳥居新築工事中に、旧鳥居の柱根が検出されている。直径約80cmの栗材である。平安時代後期から室町時代頃の間の鳥居跡と考えられている。中世の遺跡としては、阿弥陀ヶ峰城跡、今熊野城跡などの山城跡がある。また、難波野遺跡などから、中世の集落跡も確認されている。

このように、山地と海に挟まれた狭い地域ではあるが、周辺には多くの遺跡などが分布している。丹後の歴史を考える上で、重要な地域と言えよう。

3. 調査経過

平成18年度の調査は平成18年9月27日から開始した。これまでの調査経過から、難波野遺跡・難波野条里制遺跡としては第5次調査、大垣遺跡・一の宮遺跡としては第4次調査にあたる。なお、難波野遺跡・難波野条里制遺跡では、過去の調査から連番で調査区を呼称しており、今回もそれに従った。大垣遺跡・一の宮遺跡では任意に調査区名が付されているので、今回は、調査回数に枝番号を付して調査区の呼称とした。

まず、難波野遺跡で、前年度に弥生時代中期の方形貼石墓を確認した3トレンチの東側に8トレンチを設定して重機掘削を行い、その後、人力で精査、遺構掘削を行った。この8トレンチは民家の前面にあたり、その出入り用の通路を確保する必要上、東西2か所に分け、西側を8A、



第2図 調査区配置図 (宮津市都市計画図 1/2,500に加筆)

東側を8Bと呼称することとした。このトレンチでは、方形貼石墓は検出できなかったが、中世の掘立柱建物跡や井戸跡などを確認した。その後、前年度に中世の集落跡を確認した6トレンチの南西側に9トレンチを設定して同様に調査を行った。この調査区では、古墳時代中期の祭祀遺構を検出し、平安時代後期の木簡や中世の漆絵漆器などが出土した。また、この調査区の西側を若干拡張して試掘調査を行った。中世の漆絵漆器などが出土した。このほか、資材置場等になっていたため未調査であった前年度調査5トレンチの東側の微高地部分についても、10トレンチ、11トレンチを設定して試掘調査を行った。その結果、近世以降の砂の堆積やシルト層を確認したのみで、顕著な遺構・遺物は検出しなかった。

並行して、大垣・一の宮遺跡では、10月10日から、籠神社参道部分に4-1トレンチを設定して調査を行った。中世の南北方向の溝跡などを検出したが、遺構の分布はまばらで、出土遺物もわずかであった。その後、4-2トレンチ、4-3トレンチの調査を行ったが、真名井川や阿蘇海に向かって傾斜する地形を確認したのみで、顕著な遺構・遺物は検出しなかった。

各調査区は、調査終了後に埋め戻しを行っており、最終的に難波野遺跡9トレンチの埋め戻しを行って、平成19年2月9日に平成18年度の現地調査を終了した。調査面積は1,700m²である。この間、平成19年1月12日には地元の宮津市立府中小学校5・6年生の現場見学があった。また、1月20日には現地説明会を行い、116名の方々が参加された。

平成19年度の調査は、難波野遺跡・難波野条里制遺跡第6次調査として、前年度9トレンチおよびその西側拡張部での試掘の調査成果を受けて、平成19年6月12日から実施した。試掘部分を取り込んで12トレンチを設定し、調査を行った。このトレンチでは、古墳時代の遺構は検出できなかったが、中世の柱跡や井戸などの遺構や漆絵漆器などの遺物が多数出土した。8月30日には、現地事務所等の撤去を完了し、すべての現地調査作業を終了した。調査面積は450m²である。この間、8月4日に現地説明会を実施した。54名の方々が参加された。

4. 平成18年度調査の概要

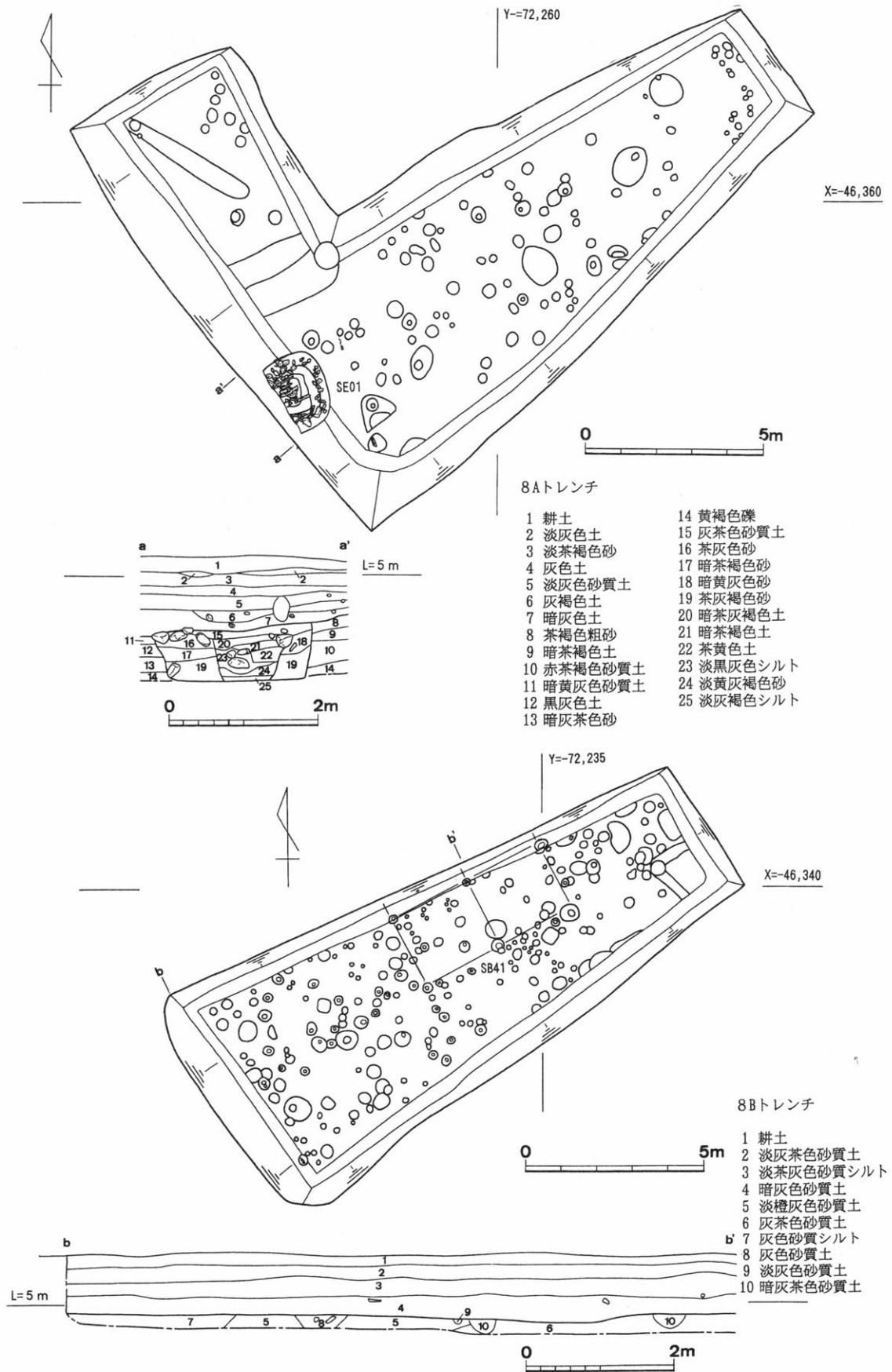
(1) 難波野遺跡・難波野条里制遺跡

1) 8A・8Bトレンチ

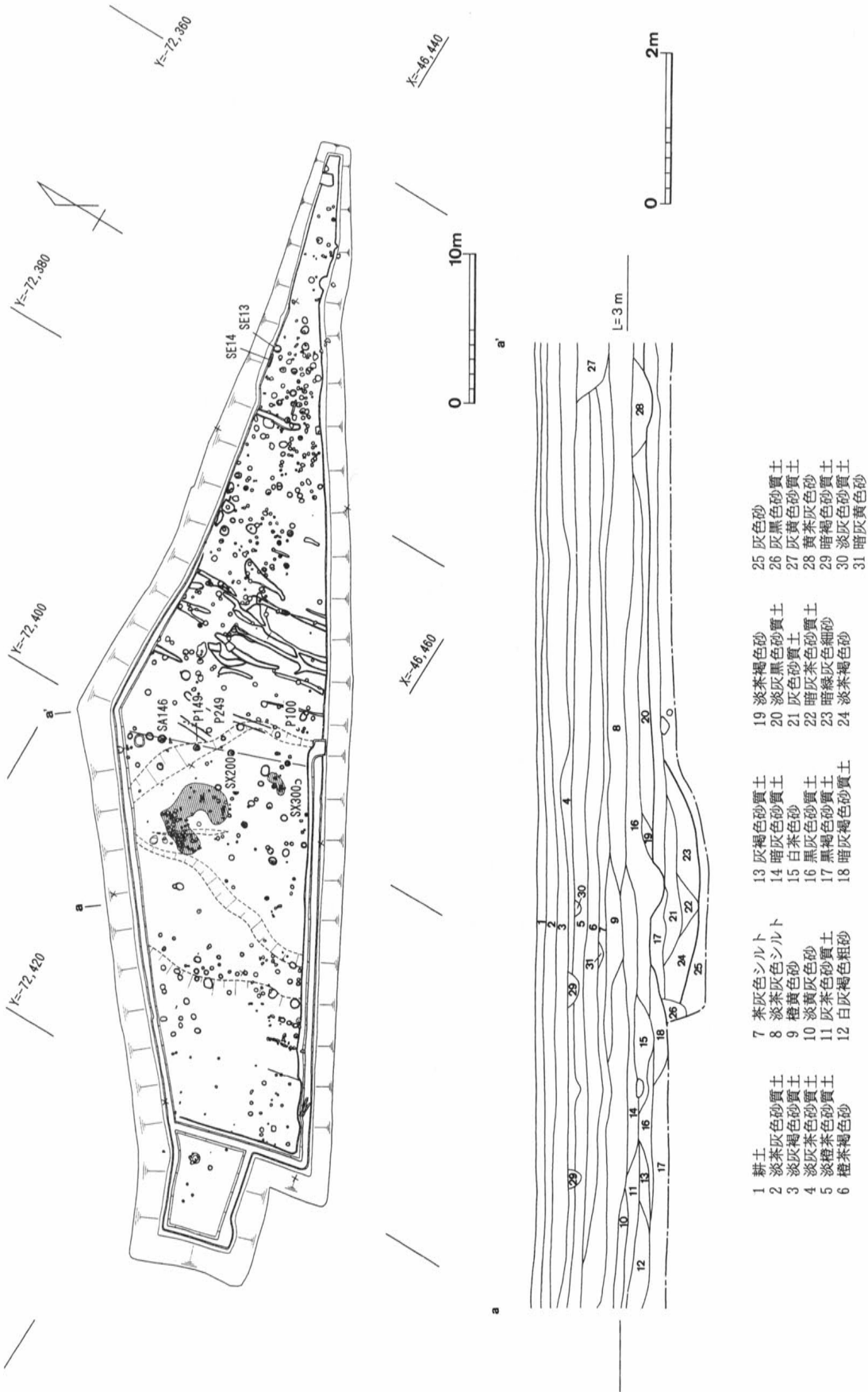
前年度に方形貼石墓を検出した地点(3トレンチ)の東側に、民家の出入り口を確保するため、トレンチを2か所に分けて設定して調査を行った。その結果、方形貼石墓は確認できなかったが、12世紀～13世紀初頭頃の井戸、中世の掘立柱建物跡などを検出した。柱穴と考えられるピットも多数検出したが、建物としてまとまるものは少ない。

井戸SE01 8Aトレンチ西壁際で検出した。一辺2.2mの方形掘形の中に一辺約0.8mの縦板組の方形井戸枠を設ける。破損しており、残存状況は良くない。深さは約0.6mである。

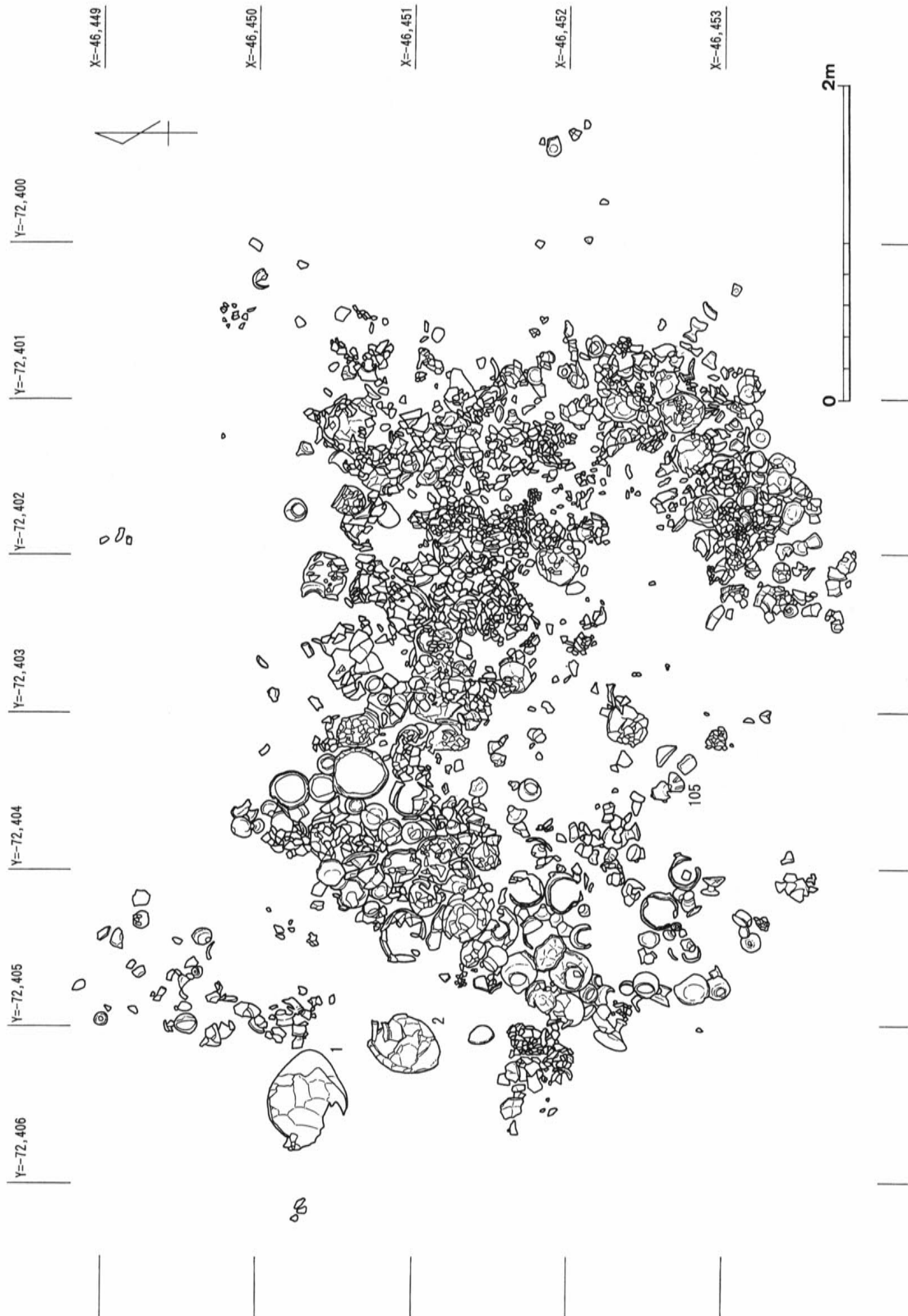
掘立柱建物跡SB41 8Bトレンチ中央やや東寄りで検出した。東西2間、南北1間以上の南北棟と考えられる建物で、建物主軸はN-30°-Wである。柱間は、東西2.15m、南北2.1mである。柱穴には、柱根や、根石が残っているものがある。



第3図 難波野遺跡8A・8Bトレンチ実測図



第4図 難波野遺跡9トレンチ実測図



第5図 難波野遺跡9トレンチ祭祀遺構S X200平面図

2) 9 トレンチ

前年度、中世の集落跡が見つかった地点(6 トレンチ)の南西側に設けたトレンチで、古墳時代と中世頃の遺構や遺物を確認した。以下、時代順に遺構・遺物を概観する。

古墳時代の遺構

祭祀遺構 S X 200 トレンチ中央やや西側で、浅瀬に多数の土器などを置いて水辺の祭祀を行ったとみられる祭祀遺構を検出した。土器は、南西側に開口する「コ」字状に配列され、その範囲は、ほぼ3 m×3.5mである。この遺構は、301個体の土器で構成されるが、そのほとんどが土師器で、須恵器はわずかである。

北西辺には主に壺、甕を4ないし5列に配した状況が認められる。出土状況から、甕や壺のうちには、高杯の上に乗っていたことを推定させるものもある。この辺の外側に、大甕2個体を配する。北東辺には壺、甕、高杯、手捏ね土器などを数列に配したことが推定されるが、崩れて散乱した状況である。南東辺では、主に高杯や杯を4列程度に配した状況がみられる。須恵器としては、高杯、ハソウなどがあるが、「コ」字状土器列の内側から主に出土している。これらの土器は、陶邑編年TK208併行期のものとみられる。

なお、この遺構からは滑石製の勾玉、白玉、有孔円板なども出土している。白玉は、284点に及ぶ。滑石製品は、主に南東辺の土器列付近で出土している。

祭祀遺構 S X 300 S X 200の南側で、小規模な土器列を検出した。8ないし9個体の土師器甕、高杯、杯などを直線状に並べる。これも古墳時代の祭祀遺構とみられる。

中世の遺構

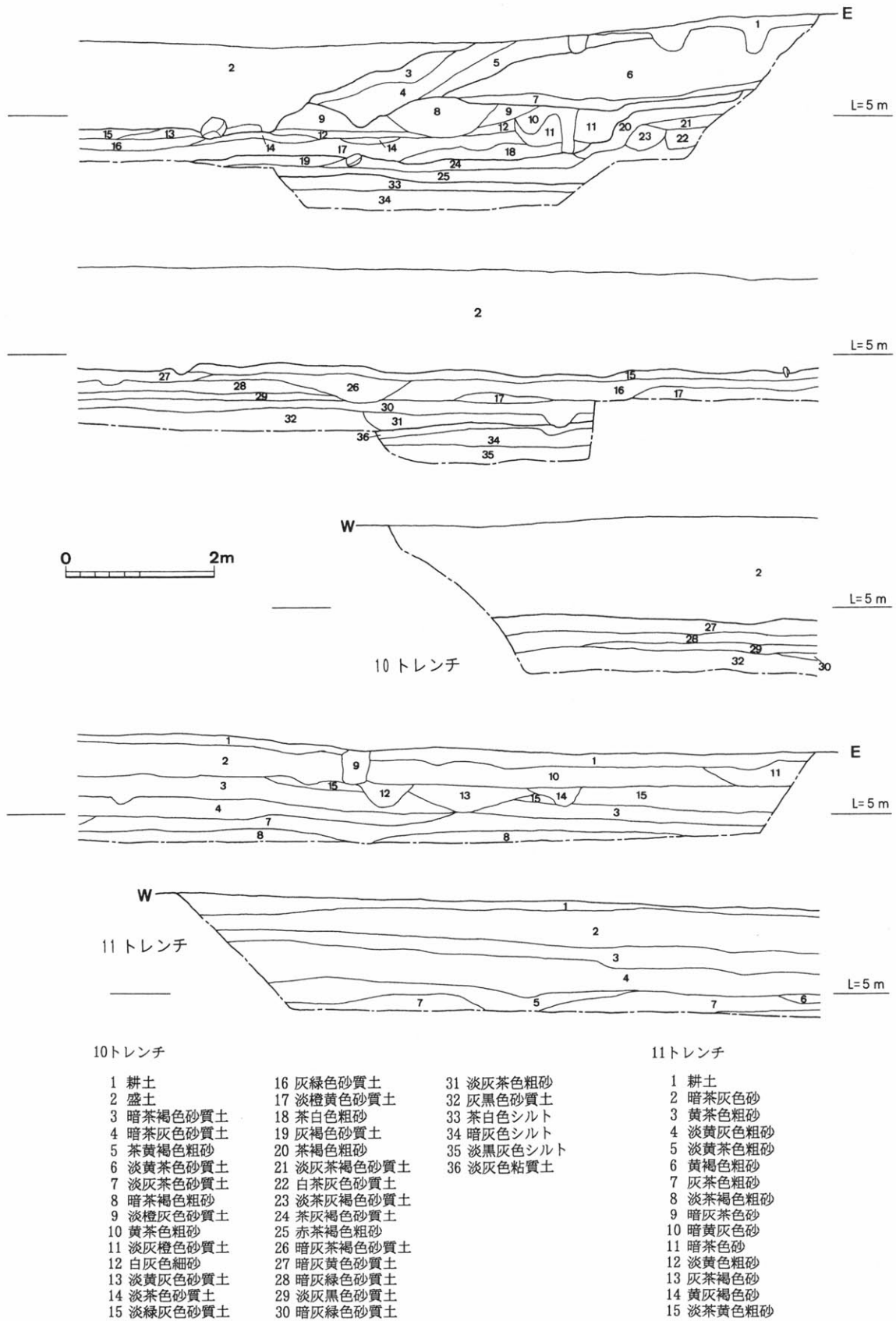
溝や柱穴、井戸などを検出した。各溝は南北方向で、トレンチ中央付近に集中している。柱穴には、柱の根元部分が残っているものが多い。

井戸 S E 13・S E 14 トレンチ東側で検出した。S E 13は、一辺約1 mの方形掘形の中に、内法0.54mの縦板組の方形井戸枠を設ける井戸である。S E 14は、直径0.66mの円形掘形の中に、直径0.4m、深さ0.42mの曲物を井戸枠として設置した円形井戸である。掘形の切り合い関係から、S E 14がS E 13に先行するものとみられる。

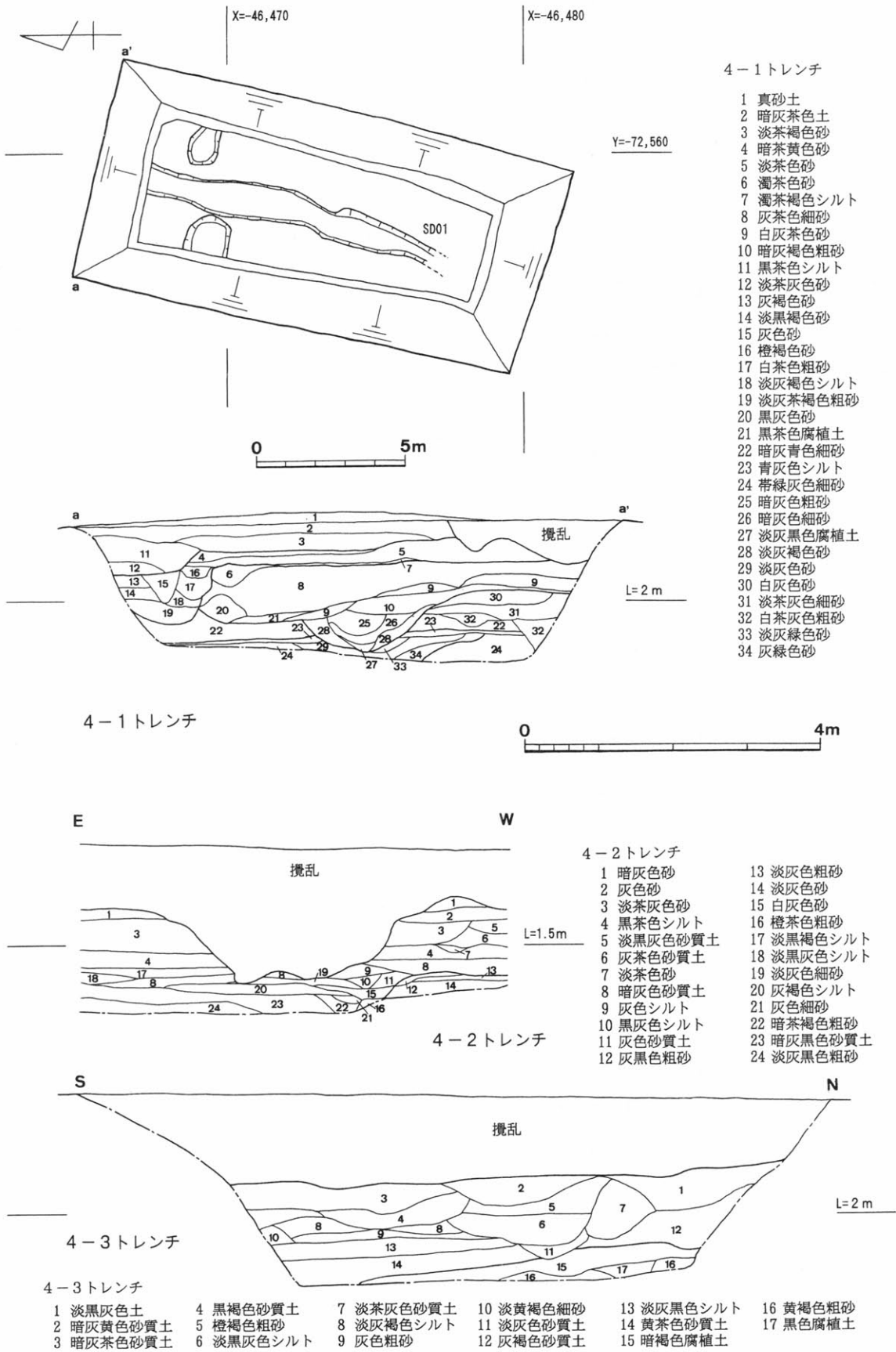
柵列 S A 146 トレンチほぼ中央、S X 200の東側で検出した。南北方向に4基の柱穴が並ぶ。柱間は2.3~2.4mであるが、北から3基目と4基目の柱間はその倍近くの4.7mになる。この柵列を構成する柱穴には、柱根が残るものがある。なお、北から1基目の柱穴埋土中から、「寛治五年」(1091)の年号が記された木簡が出土した。

このほか、トレンチ中央付近で、南北方向の素掘溝群を検出した。柱穴に切られており、先行する遺構と考えられる。真名井川に近いトレンチ南西側部分から、黒漆塗りの上に朱漆などで漆絵を描いた漆器の椀や皿などが出土した。これらの漆絵漆器には、花や鳥の文様が繊細でいねいに描かれたものもあり、残存状況はかなり良好である。また、下駄や箸などの木製品も多量に出土した。陶磁器では、中国建窯産の天目椀片などが注目される。

なお、このトレンチの西辺を西側に掘り広げて試掘を行った。その結果、中世の漆絵漆器や瓦



第6図 難波野遺跡10、11トレンチ断面図



第7図 大垣・一の宮遺跡調査区実測図

質羽釜などが出土した。また、下層に古墳時代の土器を含む包含層があることも確認できた。

3)10トレンチ、11トレンチ

前年度調査5トレンチの東側の微高地部分に2か所のトレンチを設定して試掘を行った。10トレンチは5トレンチから道路を挟んだ東側に設定した。11トレンチは10トレンチから小河川を挟んだ東側の畑地に設定した。

10トレンチは、上層は工所用資材置き場等になっていたためか、かなり攪乱されている。数層の旧水田とみられる耕土層の下層は、湿地状の堆積とみられるシルト層で、遺構はなく、出土遺物もほとんどない。東側では近世以降の小河川による堆積と考えられる砂層の堆積がみられた。

11トレンチは、ほぼ全面的に近世以降の小河川による砂層の堆積に覆われている。下層は、湿地状の堆積とみられるシルト層および礫層で、湧水が激しく、遺構・遺物は残存していなかった。

結果的に、この微高地は、近世以降の小河川による堆積によって形成されたものと考えられる。

(2) 大垣遺跡・一の宮遺跡

籠神社にこれまで設置されていた石の鳥居の跡を含む参道部分に4-1トレンチを設けて調査した。調査前に設置されていた鳥居の跡地点は、過去の鳥居の建替えなどがあったためか、かなり攪乱されており、過去に建立されていた鳥居の跡は確認できなかった。

このトレンチでは、ほぼ中央から中世の参道の西側溝の可能性のある南北方向の溝などを検出したが、遺構の分布はまばらである。なお、攪乱された土の中から、差し渡し約60cmの柱の根元部分とみられる八角形の部材が出土した。この部材に残された痕跡から、いつの時期かの鳥居の柱の根元部分の可能性も考えられる。

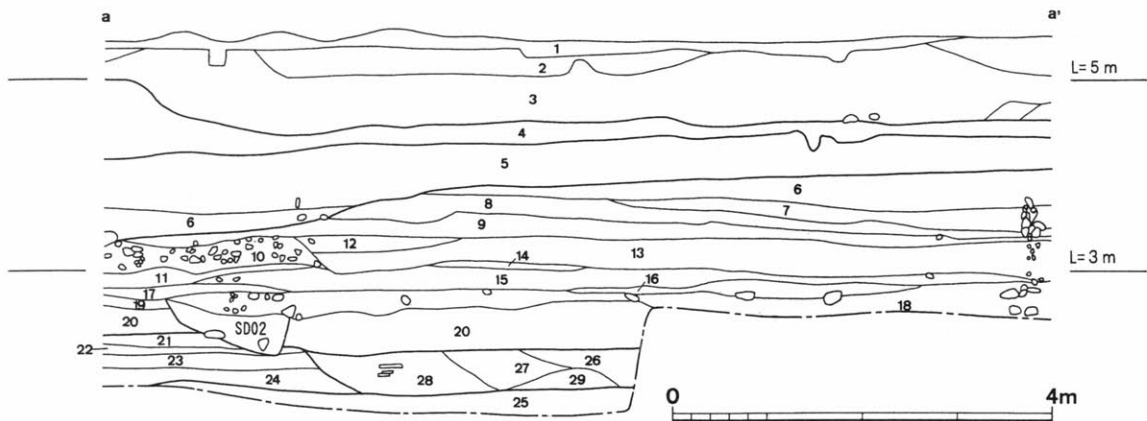
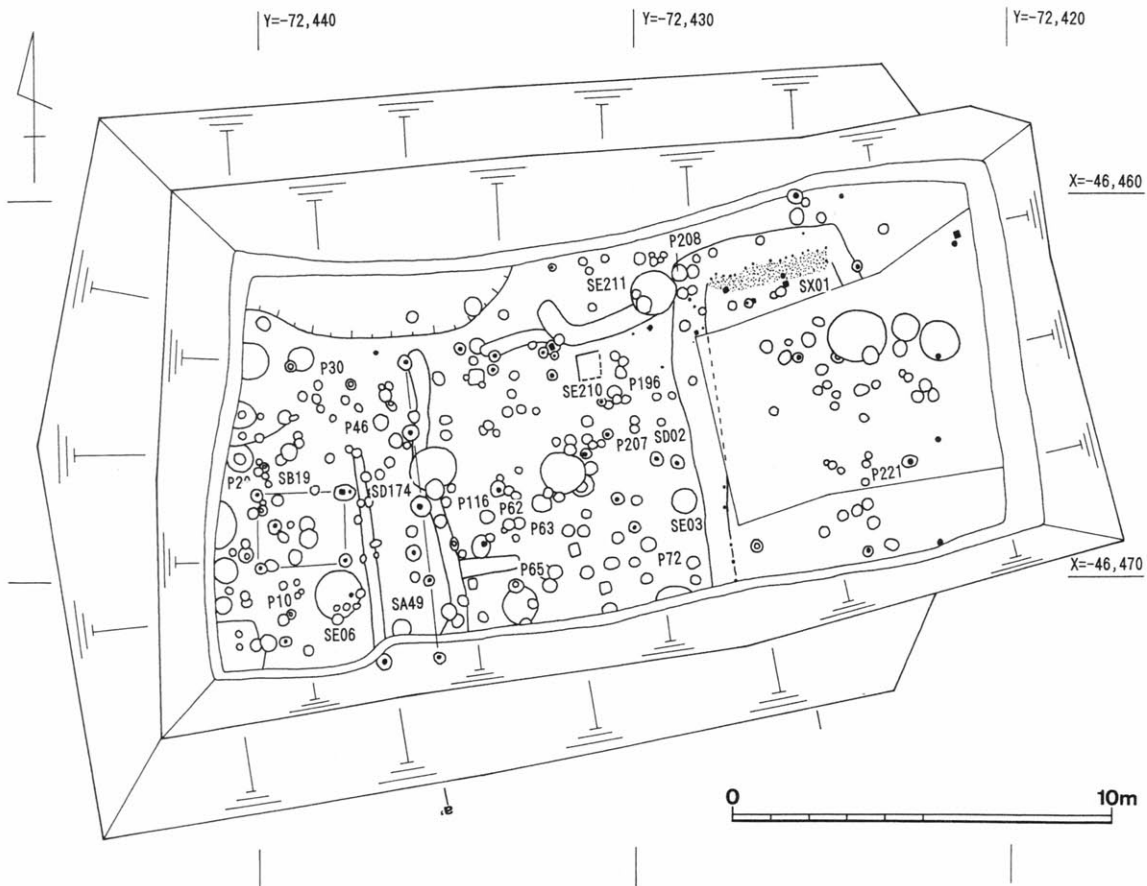
このほか、真名井川に近い東側地点にも、4-2と4-3トレンチを設けて調査したが、川や海の方角に下っていく旧地形を確認したのみである。遺物の出土もわずかである。

5、平成19年度調査の概要

前年度、古墳時代中期の祭祀遺構や中世の漆器などが多数出土した地点(9トレンチ)の西側隣接地に12トレンチを設定して実施した。この調査区では、主に中世の集落に関する遺構を検出した。13世紀後半頃を前後する時期のものともみられる。遺物では、黒漆塗りの上に朱漆で花文などを描いた漆絵の漆器椀や皿などが多数出土した。陶磁器では、中国建窯産の天目椀片の出土が目される。前年度に確認した古墳時代の遺物を含む下層部分も一部掘削したが、わずかに遺物が出土するのみであった。

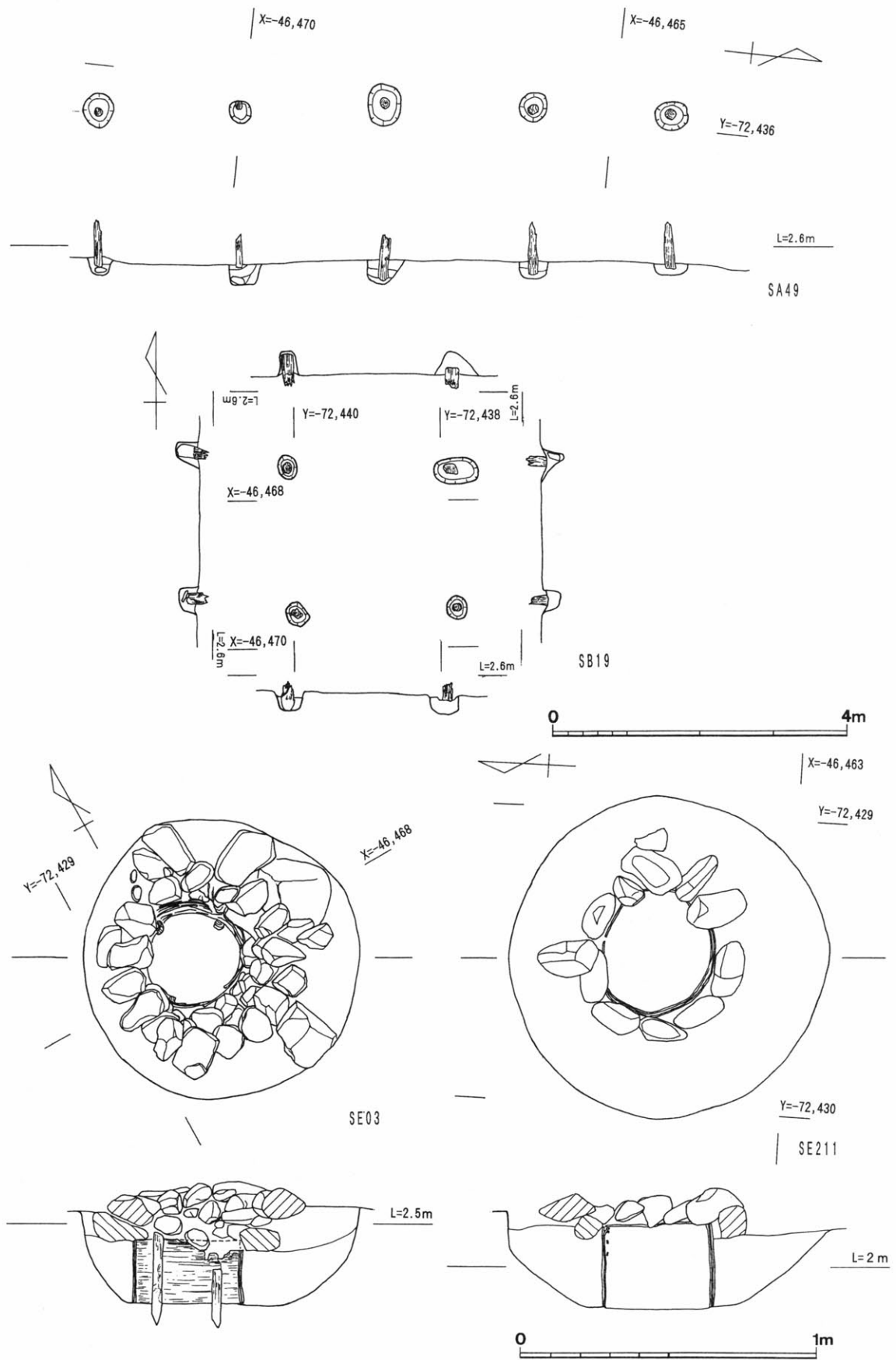
石積み遺構 S X 01 トレンチ北東側で検出した。杭で裾部を固定した長さ3.4mの石積み遺構で、何らかの建物の土台か。高さ0.4mで、2ないし3段の石積みが残る。石積みの背後の盛土部分から土師器皿などが出土した。

溝 S D 02 S X 01外側に「コ」字状にめぐる。幅0.7~0.8m、深さ0.3mを測る。南端部が杭



- | | | |
|-------------|------------|-------------|
| 1 耕土 | 11 黄灰茶色細砂 | 21 茶灰色砂質シルト |
| 2 淡黄灰色砂(盛土) | 12 淡灰茶色砂質土 | 22 橙黄色砂質土 |
| 3 淡黄褐色砂(盛土) | 13 暗灰茶色砂質土 | 23 淡橙褐色粗砂 |
| 4 旧耕土 | 14 淡茶灰色細砂 | 24 黒灰色砂質土 |
| 5 茶褐色砂質土 | 15 暗茶灰色砂質土 | 25 暗灰緑色砂質土 |
| 6 暗茶褐色砂質土 | 16 淡茶褐色砂質土 | 26 灰黄色砂質土 |
| 7 茶黄色砂質土 | 17 茶灰白色砂質土 | 27 暗灰褐色砂質土 |
| 8 茶灰色砂質土 | 18 橙茶色砂 | 28 灰黒色砂質土 |
| 9 暗黄茶色細砂 | 19 灰茶色砂質土 | 29 暗茶灰褐色砂質土 |
| 10 茶灰色砂質土 | 20 暗灰色砂質土 | |

第8図 難波野遺跡12トレンチ実測図



第9図 難波野遺跡12トレンチ遺構実測図

列があり、側壁を土留めしていたものか。この溝からは北宋銭が出土している。

掘立柱建物跡 S B 19 トレンチ西側で検出した。1間×1間の掘立柱建物跡で、柱間は、東西が2.2m、南北が2mを測る。柱根が残る。

柵列 S A 49 トレンチ西側で検出した。5基の柱穴が南北方向に並ぶ。柱間は1.9～2mである。柱根が残る。

井戸 S E 03 トレンチ中央やや南寄りで検出した。内径0.3m、深さ0.4mの小規模な円形石組井戸である。下部には曲物を入れ、細い丸杭で固定する。その上に人頭大の石を積み上げて井戸枠とする。掘形は径0.95mの円形を呈する。

井戸 S E 211 トレンチ中央北側で検出した。内径0.4m、深さ0.4mの小規模な円形石組井戸である。下部に径0.35m、高さ0.3mの曲物を入れる。その上に人頭大もしくはそれよりやや大きい石を積み上げて井戸枠とする。掘形は径1.1mの円形を呈する。

このほか、あまり広くない調査区にもかかわらず、多くの井戸が分布する。縦板組方形のもの、石組みのもの、曲物だけが残存しているものなど、さまざまな形状の井戸がみられる。

6. 出土遺物

2年度にわたる調査では、多数の遺物が出土したが、各調査区の中で遺物の出土が集中するのが、難波野遺跡・難波野条里制遺跡第5次調査9トレンチと同遺跡第6次調査12トレンチである。今回報告する遺物も、ほとんどが両調査区から出土したものである。またこの両調査区は隣接しており、ほぼ同一地点と言っても過言ではない。したがって、祭祀遺構 S X 200のような主要遺構出土遺物以外は、調査区を分けずに項目を立てて報告することとしたい。特に漆絵漆器は両調査区からしか出土しておらず、あえて調査区を分ける必要はないと考える。

(1) 祭祀遺構 S X 200 出土遺物

祭祀遺構 S X 200は、301個体の土器で構成される。ほとんどが土師器で、須恵器はわずかである。土師器には、壺、甕、高杯、杯、鉢、手捏ね土器^{てづく}などがある。須恵器は、高杯、ハソウなどで3個体出土している。また、滑石製品が、主に遺構南半部から出土している。

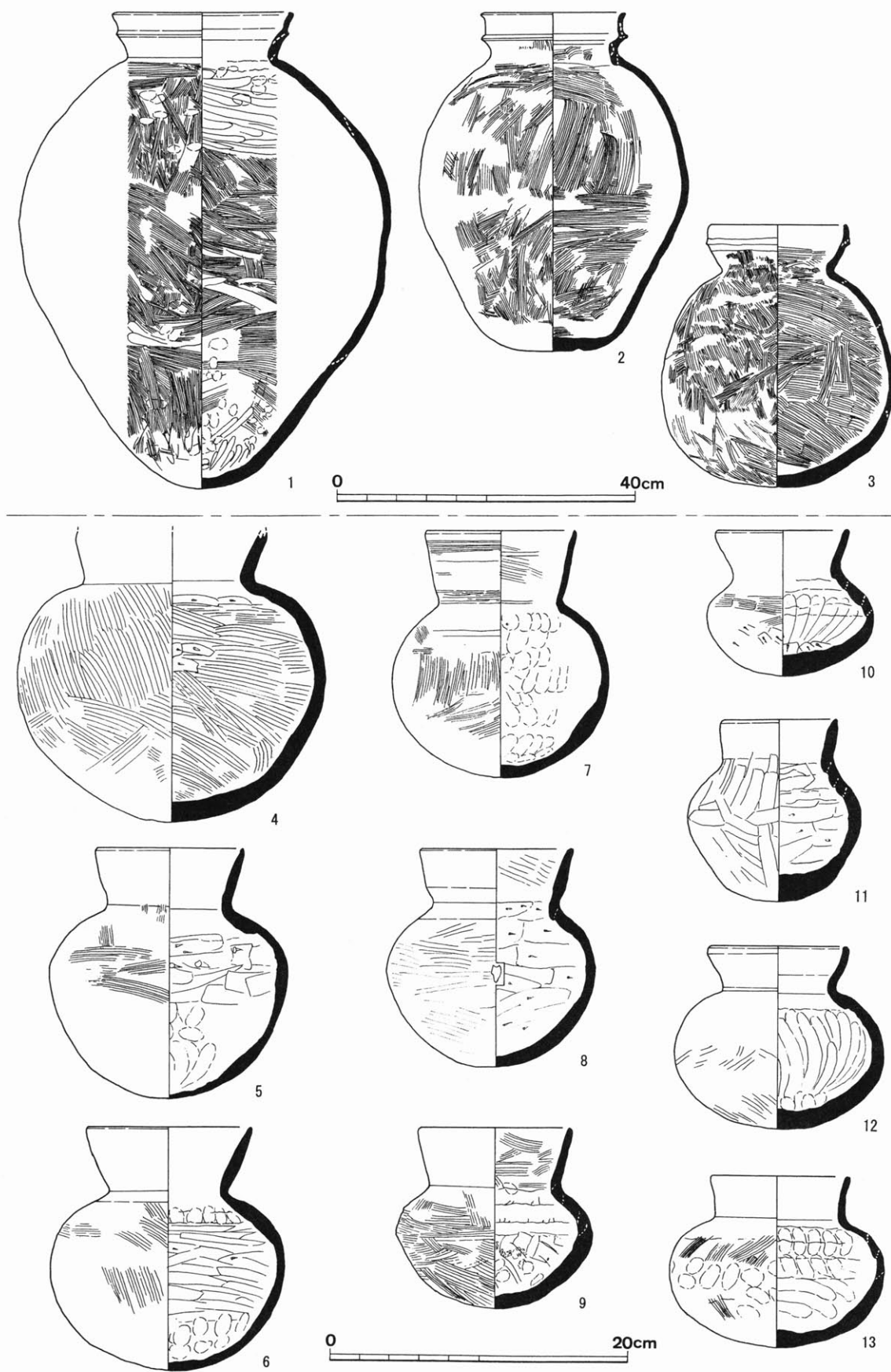
a. 土器

1) 土師器壺

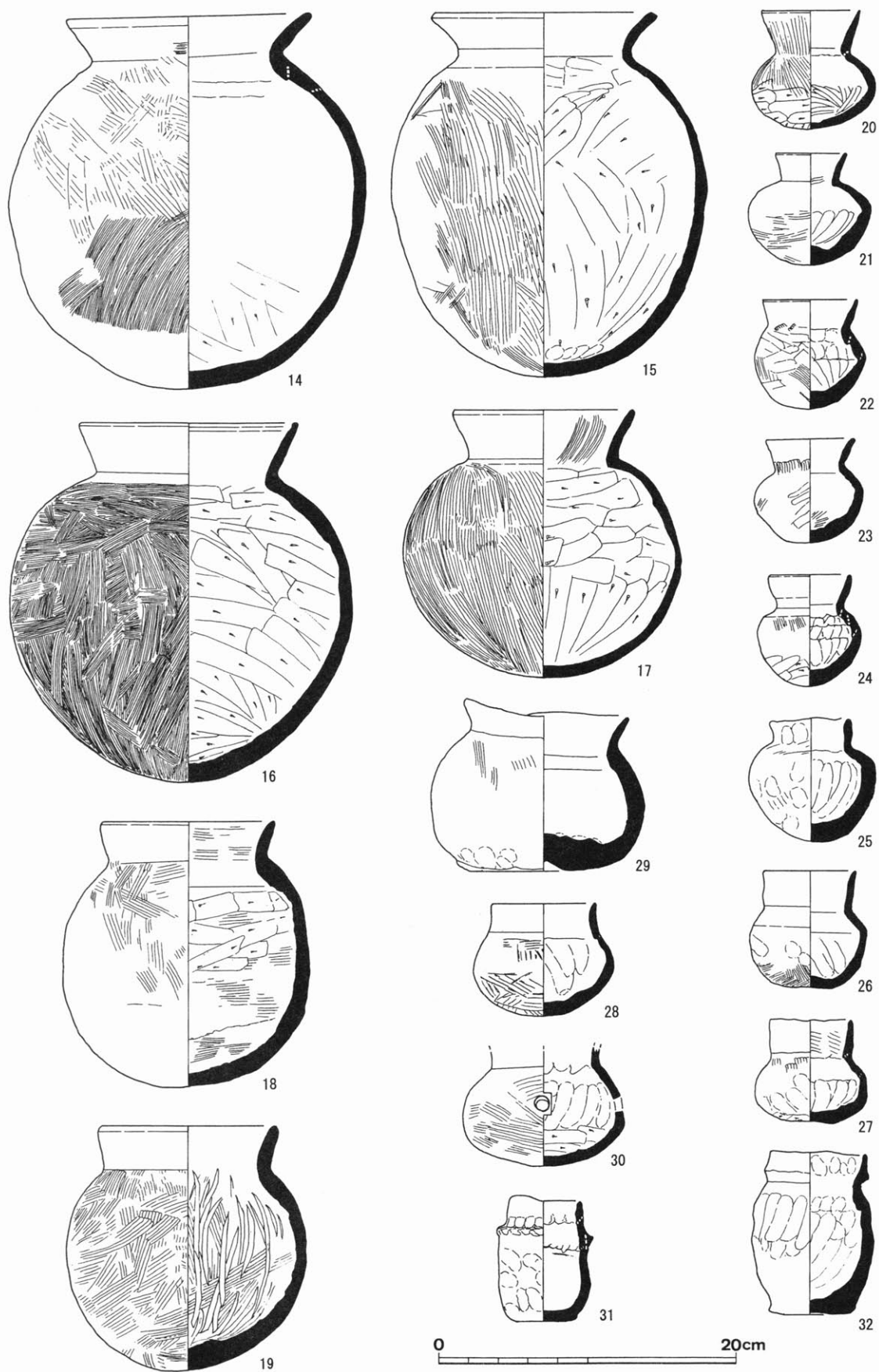
1は大型の二重口縁壺で、卵形の胴部をもつ丸底壺である。口径23.3cm、器高63.4cm、胴部最大径50cmを測る。胴部最大径が中央付近にある。2も同様の形態であるが、平底気味になる。口径18.5cm、器高45.3cmを測る。3も大型の二重口縁壺であるが、胴部最大径が中央よりも下部にある。口径18.2cm、器高34.9cmを測る。以上3点は内外面ともにハケ目調整である。

4～11は丸底壺で、胴部最大径が胴部中央およびそれより上部にある。口縁部が斜め上方に直線的に立ち上がる。8は口径10cm、器高14.6cmを測る。このタイプの小型のものが20～24である。外面ハケ目調整、内面ヘラケズリである。20は口径6.6cm、器高7.9cmを測る。

12、13は丸底壺で、胴部最大径が胴部高を上回り、胴部が扁球体を呈する。口縁部が直立気味



第10図 出土遺物実測図1 (S X200、土器)



第11図 出土遺物実測図2 (S X 200、土器)

あるいは内湾気味に立ち上がる。12は口径9cm、器高12.3cmを測る。このタイプの小型のものが25～27である。外面ハケ目調整、内面ナデ調整である。27は口径5.4cm、器高6.3cmを測る。

28は扁球体の胴部をもち口縁部がなだらかに直立気味に立ち上がる。口径7cm、器高7.5cmを測る。外面ハケ目調整およびヘラケズリ、内面ナデ調整である。

2) 土師器甕

14～17は丸底甕で、胴部最大径が胴部中央およびその上部にある。口縁部は斜め上方に直線的もしくは外反気味に立ち上がる。外面ハケ目調整、内面ヘラケズリである。14は口径16.5cm、器高25cmを測る。

18、19は丸底甕で、胴部最大径よりも器高が上回る。口縁部は斜め上方に直線的に短く立ち上がる。外面ハケ目調整、内面ヘラケズリである。18は口径11.3cm、器高17.6cmを測る。18の内面のケズリは粗い。

3) 土師器高杯

33～39は口縁部が直線的に立ち上がる高杯で、杯の底部から口縁部が明瞭に屈曲する。脚部は中空で、裾広がりになる。34は口径17cm、器高13.1cmを測る。33はそのタイプのやや大型のもので、口径20cm、器高16cmを測る。

41～47は口縁部が外反気味に立ち上がる高杯で、杯の底部から口縁部が明瞭に屈曲する。脚部は中空で、裾広がりになる。41は口径17.9cm、器高13cmを測る。40はそのタイプのやや大型のものである。口径22.1cm、器高11.5cmを測る。

48、49は口縁部が外反気味に立ち上がる高杯で、杯の底部から口縁部が明瞭に屈曲する。脚部は中実で、裾広がりになる。48は口径14.4cm、器高12.3cmを測る。

50、51は口縁部が曲線的に立ち上がる高杯で、杯底部と口縁部の境にわずかに稜線がめぐる。脚部は中空で、裾広がりになる。50は口径14.9cm、器高12.5cmを測る。

52～55は口縁部が曲線的に立ち上がる高杯で、杯底部と口縁部の境に稜線がない。脚部は中空で、裾広がりになる。53は口径14.8cm、器高11.2cmを測る。

56、57は深めの椀状の杯部を持つ高杯である。脚部は中空で、裾広がりになる。56は口径16cm、器高14.5cmを測る。

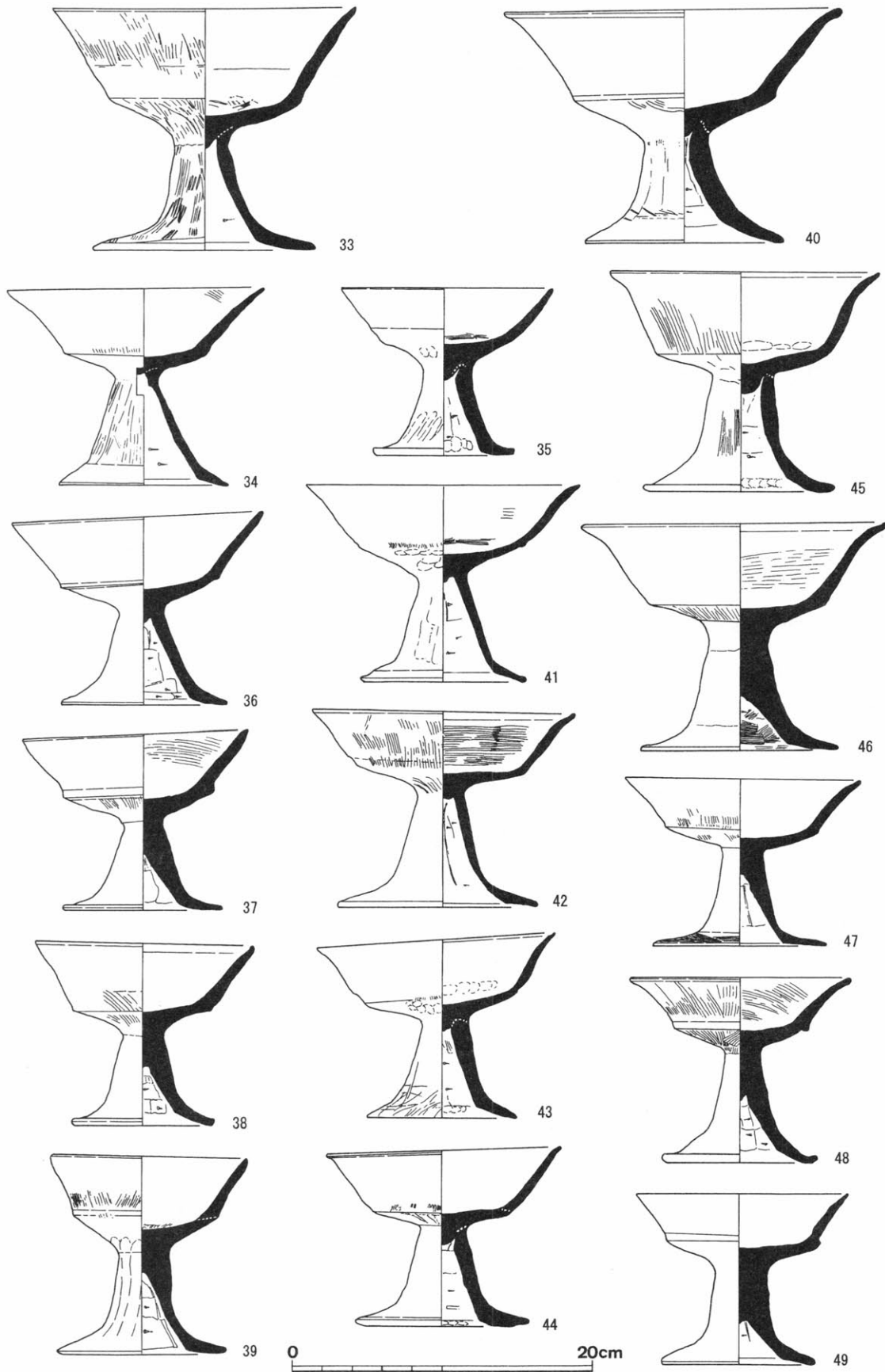
58は浅い椀状の杯部を持つ高杯である。脚部は中実で、裾広がりになる。口径12.8cm、器高9.8cmを測る。

59～63は杯部の口縁部が内湾して立ち上がり端部がくびれ気味となる高杯である。脚部は中空で、裾広がりになる。59は口径14.6cm、器高13.8cmを測る。

4) 土師器鉢

64、65は平底の底部から口縁部が浅く立ち上がる鉢である。64は口径12cm、器高5cmを測る。底部外面に木の葉痕が残る。内面はハケ原体による放射状のケズリがみられる。

66、67は平底の底部から体部が内湾して立ち上がる鉢で、口縁部が短く立ち上がる。67は口径12.2cm、器高7.2cmを測る。外面底部に木の葉痕が残る。68はこのタイプのやや小型のものであ



第12図 出土遺物実測図3 (S X200、土器)

る。また、85はこのタイプの台付きのものである。

69は丸底の体部から口縁部が短く立ち上がる鉢である。口径9.7cm、器高7.7cmを測る。

70は平底の鉢で、体部と口縁部の境がわずかにくびれた筒状のものである。口径7.9cm、器高7.3cmを測る。

5) 土師器杯

71～82は丸底の底部から口縁部が内湾気味に立ち上がる杯である。71は口径14.8cm、器高6.1cmを測る。

83、84は丸底の底部から口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部が外反気味になる杯である。84は口径11.9cm、器高5.4cmを測る。

6) 土師器手捏ね土器

筒状の土器で、86～101がそれにあたる。86は口径10.3cm、器高6.3cmを測る。97は口径2.2cm、器高2.5cmを測る。

29は厚手の壺形の手捏ね土器で、口径10.8cm、器高11.5cmを測る。31は蛸壺形の手捏ね土器で、口径4.5cm、器高8.1cmを測る。32は二重口縁壺形の手捏ね土器で、口径6.3cm、器高10.9cmを測る。

7) その他の土師器

30は土師器ハソウである。胴部中央に円孔を穿つ。最大胴径10.8cmを測る。102は土師器把手付椀である。口径5.9cmを測る。

8) 須恵器

103は須恵器椀で、胴部に波状文をめぐらす。あるいは把手付椀とも考えられる。口径9.2cm、器高6.2cmを測る。104は須恵器ハソウである。胴部外面は丁寧にナデ調整され、無文である。最大胴部径11.1cmを測る。105は須恵器無蓋高杯である。杯部口縁端部は外反し、外面には上に2条、下に1条の突帯をめぐらし、その間に波状文を施す。杯部に細い環状の把手が付く。脚部には台形状の透かしを3か所に持つ。口径18.8cm、器高13.6cmを測る。

b. 石製品

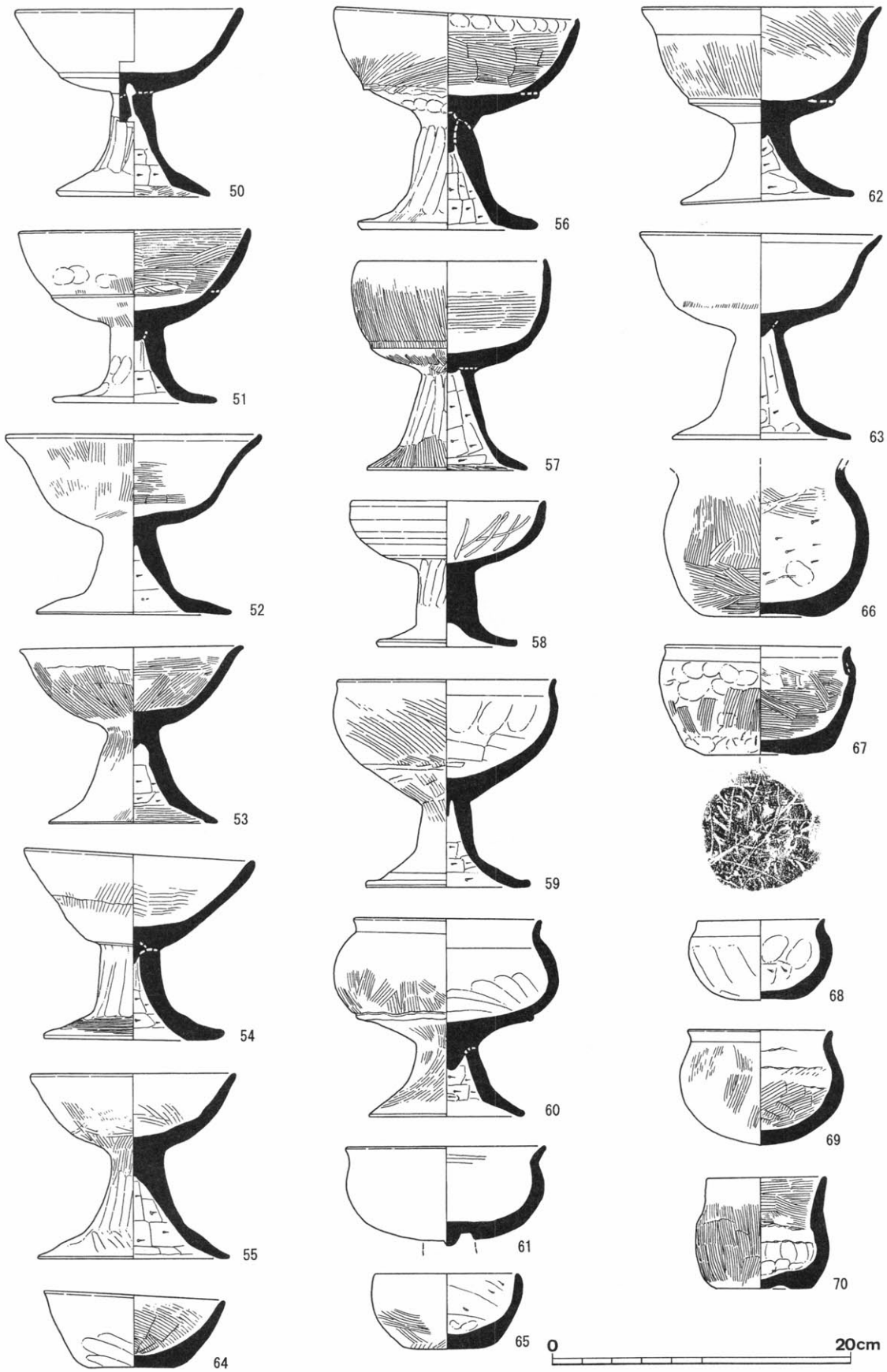
115、116は滑石製勾玉で、板状を呈する。115は長さ3.1cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。116は尾部を欠失する。117、118は滑石製有孔円板で、方形の板状石材を隅切したような形状である。117は長さ、幅ともに2.5cm、厚さ0.3cmを測る。118は長さ2.8cm、幅2.5cm、厚さ0.4cmを測る。119は水晶の扁平な結晶原石である。長さ4.2cm、幅1.6cm、厚さ0.7cmを測る。

120～189は滑石製白玉である。出土総点数は284点である。内訳は、径0.7cmのやや大型のものが26点、径0.5cmのものが84点、径0.4cmのやや小型のものが166点、破損品8点である。

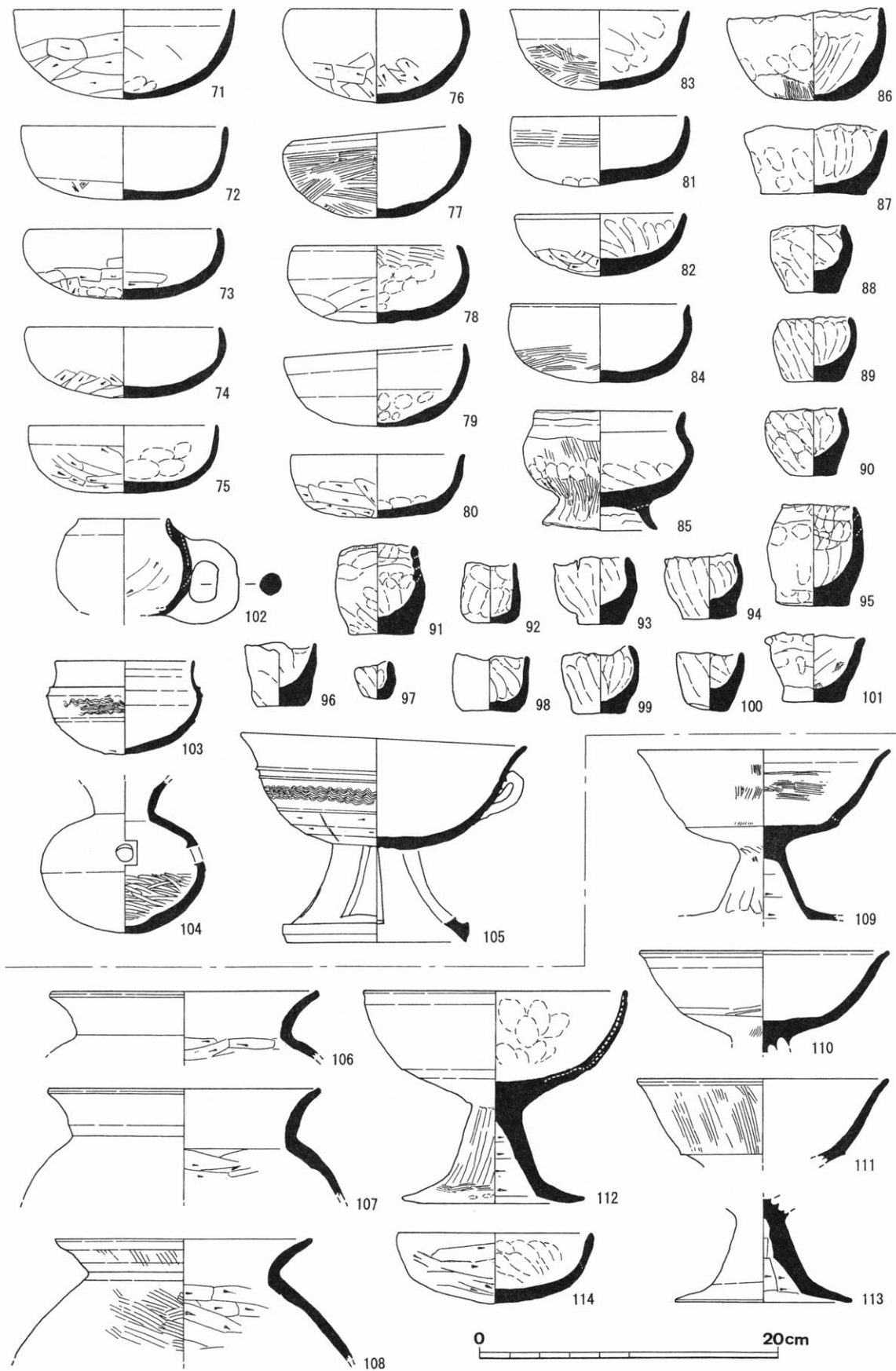
(2) 祭祀遺構 S X 300 出土遺物

祭祀遺構 S X 300は祭祀遺構 S X 200の南東側に位置し、土器を直線的に並べた遺構である。この遺構は8ないし9個体の土器で構成される。

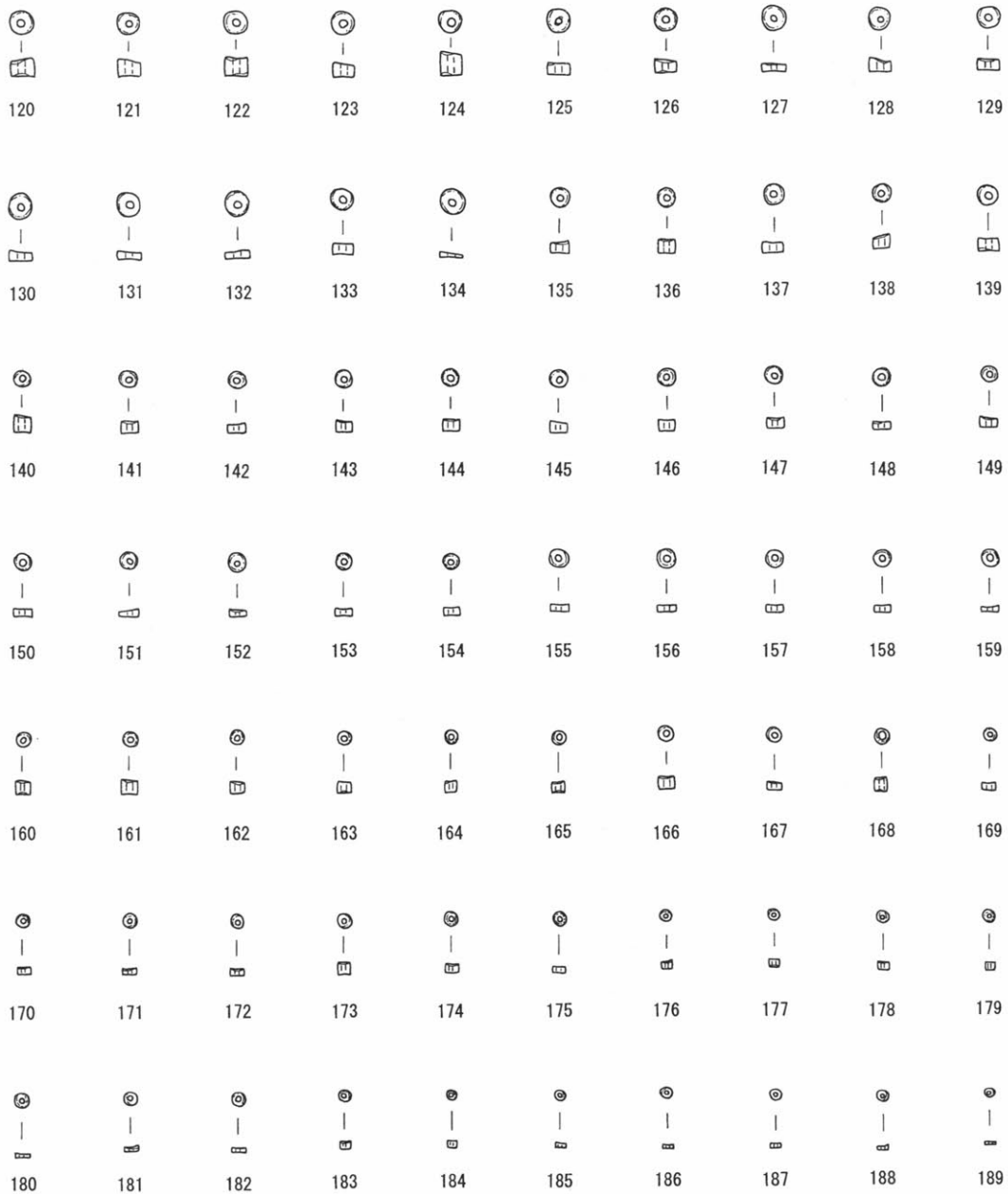
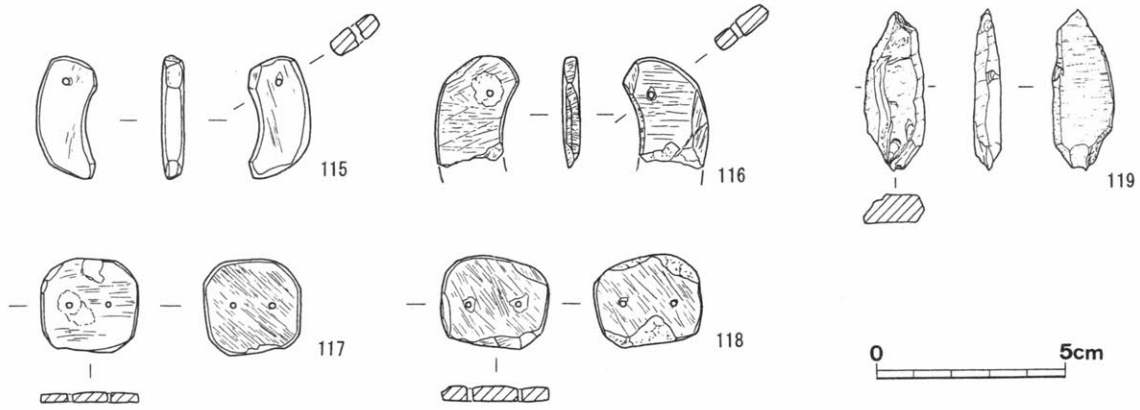
106、107、108は土師器甕で、口縁端部が外反して立ち上がる。107は口径18cmを測る。内面は



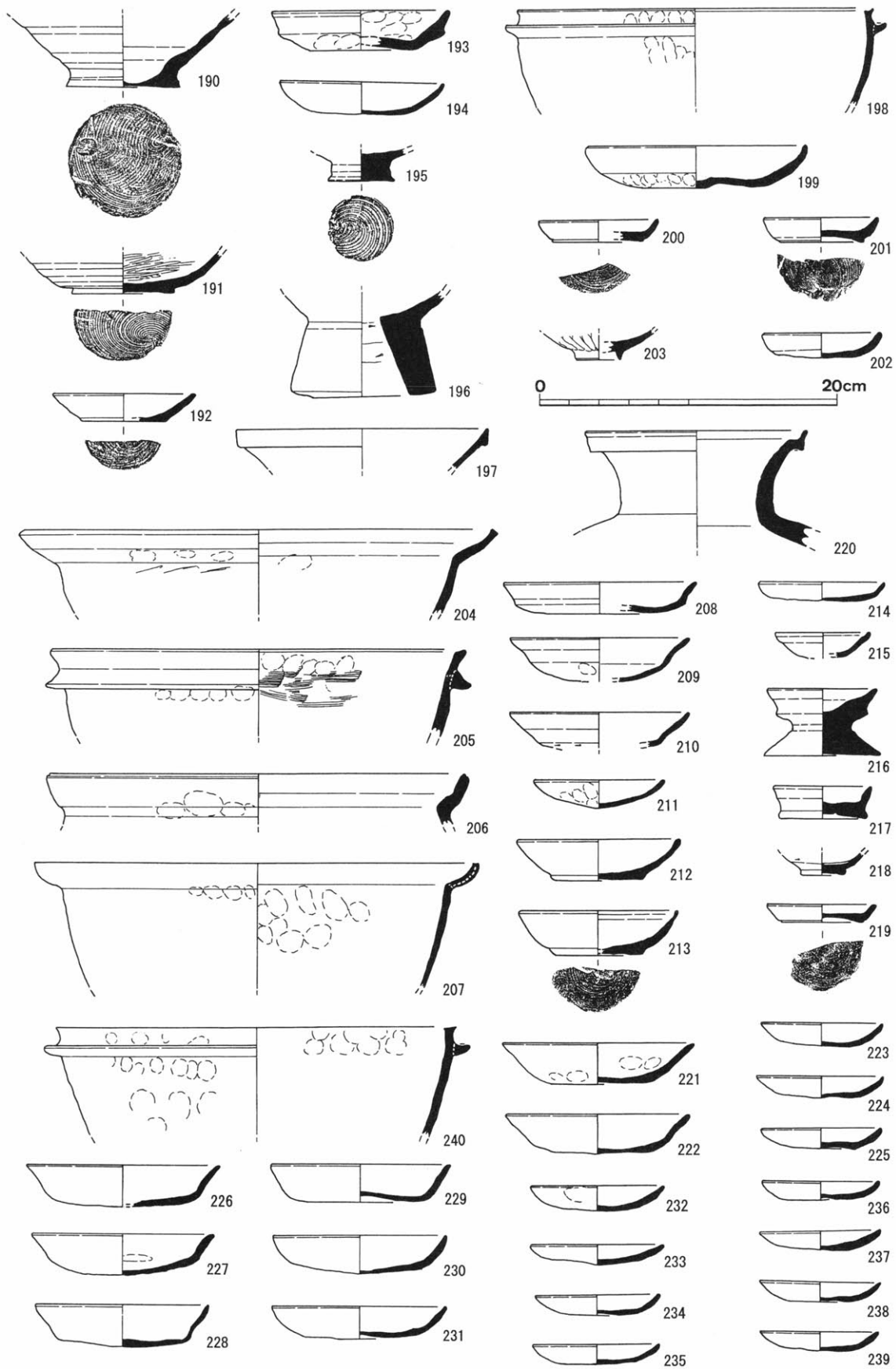
第13図 出土遺物実測図4 (S X200、土器)



第14図 出土遺物実測図5 (S X 200、S X 300、土器)



第15図 出土遺物実測図6 (S X200、石製品)



第16図 出土遺物実測図7 (遺構出土土器、陶磁器)

頸部までヘラケズリである。

109、111は口縁部が外反気味に立ち上がる高杯で、杯の底部から口縁部が明瞭に屈曲する。109の脚部は中空で、裾広がりになる。口径16.6cmを測る。110は口縁部が曲線的に立ち上がる高杯で、杯底部と口縁部の境にわずかに稜線がめぐる。口径16.5cmを測る。112は深めの椀状の杯部を持つ高杯である。脚部は中空で、裾広がりになる。口径17.4cm、器高14.2cmを測る。113は高杯の脚部で、脚柱は中空で、裾広がりになる。

114は丸底の底部から口縁部が内湾気味に立ち上がる杯である。外面ヘラケズリである。口径12.8cm、器高4.9cmを測る。

(3) その他の遺構出土遺物

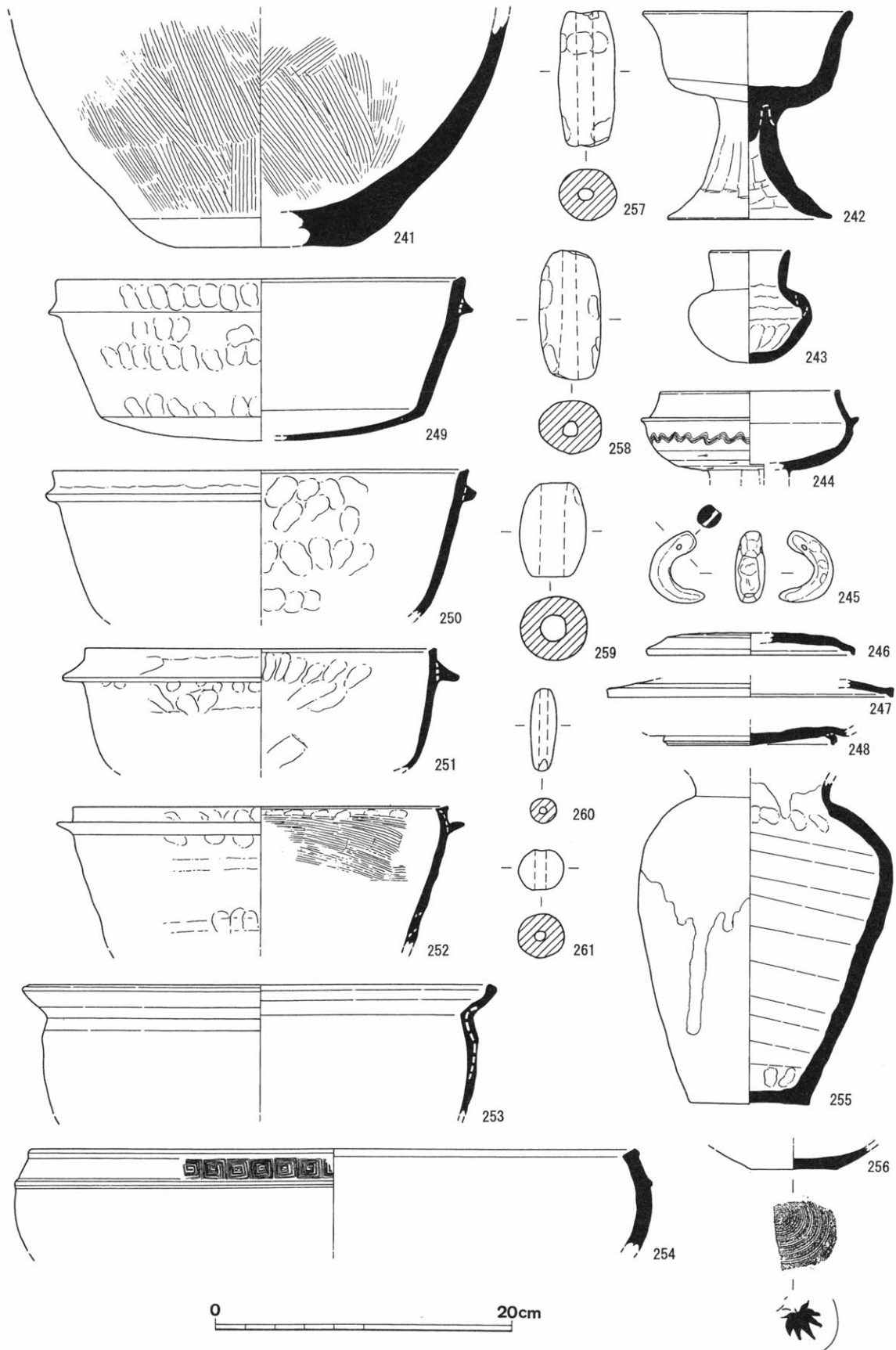
a. 9トレンチ

190はロクロ整形の土師器椀で、底部糸切である。191は黒色土器椀で、底部糸切である。192はロクロ整形の土師器皿で、底部糸切である。口径9cm、器高1.8cmを測る。これらの土器は、柱穴P249から出土した。193は土師器皿で、口縁部外面を強くナデ調整する。口径12cm、器高2.6cmを測る。194も土師器皿で、口縁部が丸味を持って立ち上がる。口径11cm、器高2.7cmを測る。この2点は、柱穴P149出土である。196は土師器器台とみられる。杯部を欠失する。井戸SE13出土である。197は、中国製の白磁椀で、口縁端部はやや太い玉縁状になる。口径9.2cmを測る。柱穴P100出土である。

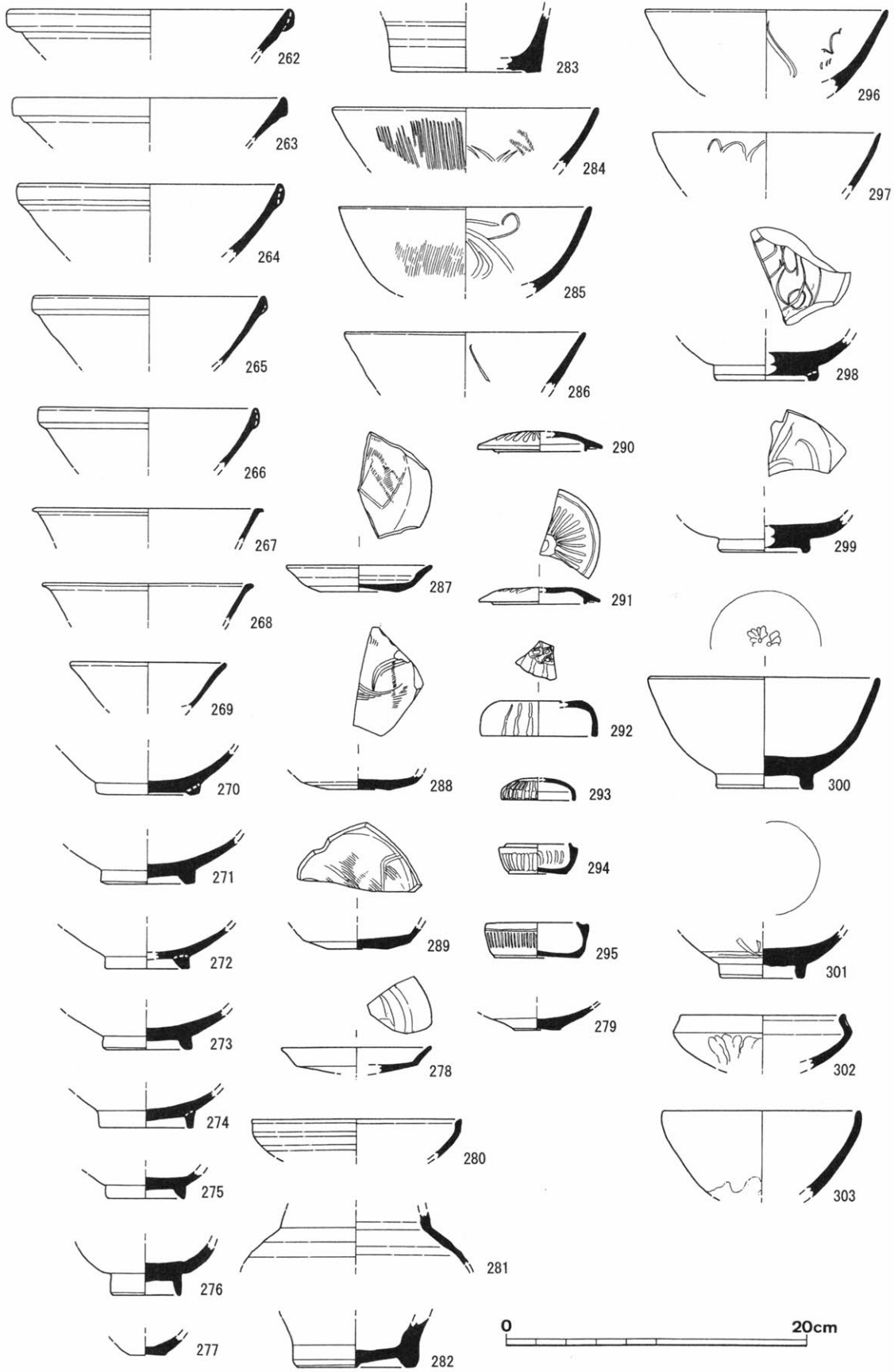
b. 12トレンチ

198は瓦質羽釜で、口径24cmを測る。溝SD02出土である。199は土師器皿で、口縁部が丸味を持って立ち上がる。口径14.8cmを測る。井戸SE06出土である。200、201はロクロ整形の土師器皿で、底部糸切である。201は口径7.6cm、器高1.7cmを測る。202は土師器皿で、口縁部が丸味を持って立ち上がる。口径8cm、器高1.7cmを測る。以上3点は井戸SE210出土である。203は中国製青磁椀である。龍泉窯の製品とみられ、外面に連弁文を刻する。溝SD174出土である。

204は瓦質鍋で、口径31.4cmを測る。柱穴P20出土である。205は瓦質羽釜で、口径27.8cmを測る。柱穴P207出土である。206は瓦質鍋で、口径27.8cmを測る。柱穴P208出土である。207は瓦質鍋で、口径29.8cmを測る。213はロクロ整形の土師器椀で、口径10.6cm、器高2.8cmを測る。219はロクロ整形の土師器皿で、口径7.4cm、器高1.2cmを測る。以上3点は柱穴P65出土である。208は土師器皿で、口縁部外面を強くナデ整形する。口径12.8cm、器高2.1cmを測る。柱穴P62出土である。209～211は柱穴P166出土の土師器皿である。209、210は口縁部が屈曲して立ち上がるもので、口径12cmを測る。211は、口径8.8cm、器高1.9cmを測り、口縁部が丸味を持って立ち上がる。212はロクロ整形の土師器皿で、口径10.8cm、器高2.8cmを測る。柱穴P46出土である。214は土師器皿で、口径8.4cm、器高1.3cmを測る。柱穴P10出土である。215は土師器皿で、口径6.4cmとやや小振りであり、いわゆるへそ皿の可能性もある。柱穴P196出土である。216は土師器器台で、ロクロ整形である。口径7.2cm、器高4.4cm、底径8cmを測る。柱穴P221出土である。217は土師器皿もしくは器台と考えられる。ロクロ整形で、口径6.4cm、器高2.2cmを測る。柱穴



第17図 出土遺物実測図8 (包含層出土土器、陶磁器)



第18図 出土遺物実測図9 (中国製陶磁器)

P 63出土である。

218は中国建窯産の天目椀の底部とみられる。内面に黒釉を施し、外面高台際は露胎である。胎土は暗灰色を呈する。高台径は3cmで、小振りの天目椀とみられる。柱穴P 30出土である。220は越前産の壺である。口縁端部を上方に拡張する。口径14.8cmを測る。柱穴P 72出土である。

221～225は石積み遺構S X 01背後の盛土中から出土した土師器皿である。まとめて出土しており、あるいはS X 01構築の途中で置かれたものか。221、222は口径12cm前後、器高2.8cmで、口縁部が屈曲して立ち上がる。223～225は口径8.1～8.6cm、器高1.4～1.6cmを測る小型のもので、口縁部が丸味を持って立ち上がる。13世紀後半のものと考えられる。

226～240は石積み遺構S X 01西側から出土したものである。付近から、漆絵漆器なども出土している。226～231は土師器皿で、口径12cm前後、器高2.8cm前後を測る。口縁部が屈曲して立ち上がるもの(226～229)と丸味を持って立ち上がるもの(230・231)がある。232～239は土師器皿で、口径8～9cm、器高1.4cm前後を測る。口縁部が丸味を持って立ち上がる。240は瓦質羽釜で、口径27.2cmを測る。これらの遺物は、上記S X 01背後の盛土出土のものと同時期と見られる。

(4) 包含層出土遺物

a. 国産土器、陶磁器

241～245は9トレンチ精査中に出土したもので、出土位置から、祭祀遺構S X 200に係る可能性も考えられる。241は大型の土師器壺の底部とみられる。内外面ともハケ目調整である。242は土師器高杯で、外反して立ち上がる杯部をもつ。口径13.8cm、器高14cmを測る。243は土師器壺で、口径5.3cm、器高7.4cmを測る小型のものである。244は須恵器有蓋高杯である。脚部を欠く。体部外面に波状文を巡らす。脚部には方形透かしの痕跡が残る。口径12cmを測る。陶邑編年のTK 208形式に併行するものか。245は勾玉形土製品である。祭祀用遺物か。

246、247は須恵器杯蓋である。8世紀頃のものか。246は9トレンチ、247は10トレンチ出土である。248は須恵器杯底部である。8世紀頃のものか。9トレンチ出土である。

249、250、252は瓦質羽釜で、12トレンチ出土である。口径25.5～28.1cmを測る。251は瓦質羽釜で、9トレンチ出土である。口径23.6cmを測る。253は瓦質鍋で、9トレンチ出土である。口径31.2cmを測る。254は瓦質火舎である。口縁部外面に雷文を押印施文する。9トレンチ出土で、口径41cmを測る。

255は丹波産の壺である。口縁部を欠く。最大胴部径17cmを測る。12トレンチ、近世頃の土石流堆積とみられる層中から出土した。256は黒色土器椀底部である。糸切の底部に楓とみられる墨画が描かれる。9トレンチ出土である。257～261は土錘である。大きさ、形状も様々なものが出土している。図示したものは、9トレンチ出土である。

b. 中国製陶磁器

報告する遺物は、287、302が12トレンチ出土である以外、ほとんど9トレンチから出土したものである。

262～266は口縁端部が玉縁状になる白磁椀である。口径14.4～18.4cmを測る。12世紀頃のもの

か。267、268は口縁端部が外反する白磁碗である。口径13.8～15cmを測る。12世紀頃のものか。269は口縁端部が無釉の白磁である。皿とも考えられる。270～277は白磁碗の底部である。270は口縁端部が玉縁状になる碗の高台とみられる。276は体部が湾曲気味に立ち上がる。277は碁筭底状の底部で、小碗のものか。278は白磁の皿で、口縁部が屈曲して斜め上方に立ち上がる。見込みには刻文を施す。279は碁筭底の白磁皿とみられる。280は白磁碗で、口縁端部がくびれた形状である。焼成が甘く、釉は黄味を帯び、剥落が著しい。281、282は白磁壺で、ともに焼成が甘く、釉は黄味を帯び、剥落が著しい。

283は越州窯産の青磁壺底部で、底径9.8cmを測る。284、285は同安窯産の青磁碗で、外面には直線状の櫛描文を施す。284は口径17.4cmを測り、内面にW字状の櫛描文を施す。12世紀後半頃のものか。296～301は龍泉窯産の青磁碗である。296は口径16cmを測り、内面に連弁文を施す。297、301は外面に連弁文を刻出する。298、299は見込みに刻花文を施す。300は口径15cm、器高7.4cmを測り、見込みに印花文を施す。302は青磁碗で、外面に連弁文を刻出する。口縁端部はくびれ気味に内傾しており、扁平な天目碗形を呈する。口径10.8cmを測る。287～289は青磁皿で、見込みに櫛描文、刻文を施す。口縁部が屈曲して斜め上方に立ち上がり、底部は碁筭底状である。287は口径9.6cm、器高1.8cmを測る。

286は青白磁碗で、口径15.8cmを測る。内面に刻文を施す。290、291は青白磁小壺の蓋で、内側にかえりを持つ。かえり径6cm、器高1.1～1.3cmを測る。292、293は青白磁合子の蓋で、292は口径7.6cm、293は口径4.8cmを測る。294は青白磁合子の身部で、口径4.2cm、器高2cmを測る。295は合子の身部で、口径5.6cm、器高2.3cmを測る。釉色は黄褐色を呈するが、焼成の甘い青白磁合子とも考えられる。

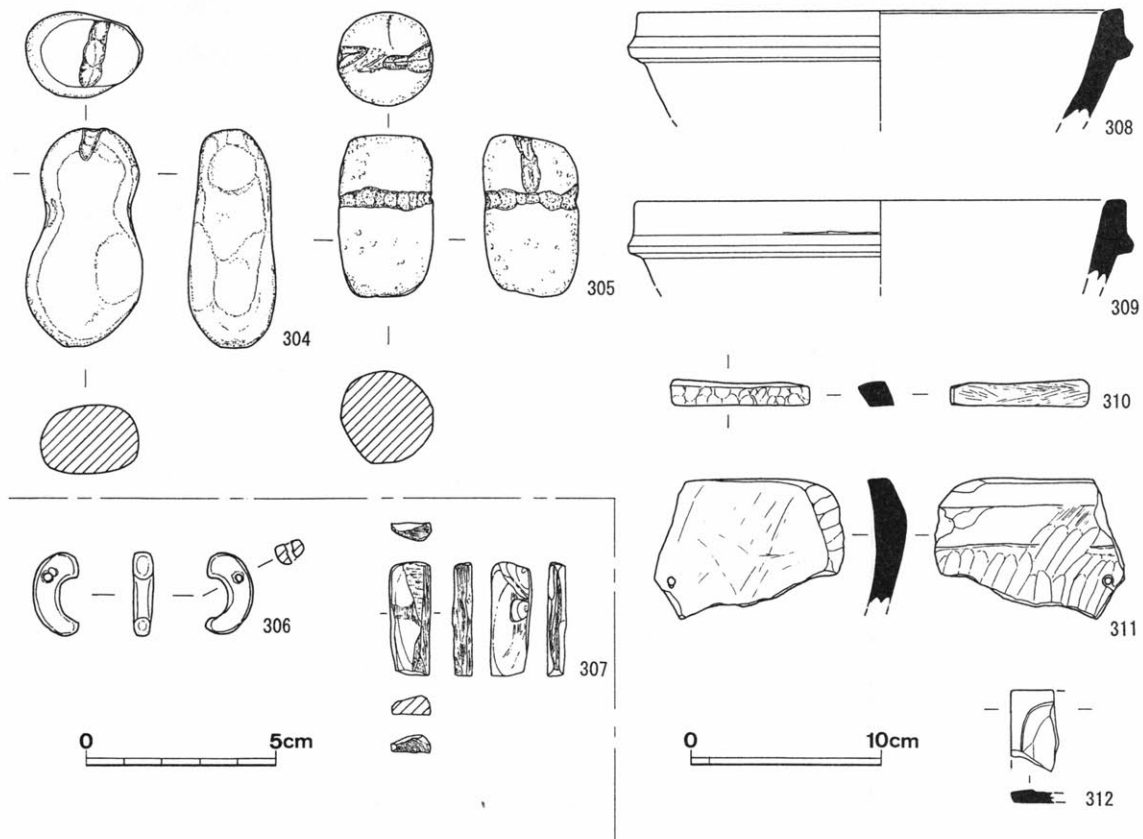
303は建窯産の天目碗である。内外面ともに上下方向に流れる細い斑文がみられる。いわゆる「禾目天目」と呼ばれるものであろう。外面は高台付近が露胎で、施釉境に釉溜りができる。胎土は灰色を呈する。口径12.8cmを測る。

(5) 石製品

304、305は石錘で、9トレンチ出土である。304は胴部がくびれており、扁平な瓢箪形を呈する。長さ11.5cm、最大幅6.2cm、厚さ3.7cmを測る。上端部に切目を施す。305は長さ8.5cm、径4.9cmの筒形を呈する。上端部および胴周りに切目を施す。

306は滑石製勾玉で、9トレンチから出土した。長さ2.1cm、幅1.2cm、径0.6cmを測る。307は緑色凝灰岩製で、研磨痕が見られる。玉の未成品とみられ、付近で玉造りが行われていたことを示すものか。長さ2.9cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。8トレンチから出土した。

308、309は滑石製石鍋で、口径は26cm前後である。308は9トレンチから、309は12トレンチから出土した。310は滑石製石鍋の部分とみられ、端面に研磨痕があることから、何らかの目的で再利用されたものとみられる。9トレンチ出土である。311は滑石製石鍋片で、たがの部分を削りおとした痕跡がある。小円孔が穿たれていることから、温石として再利用されたものとみられる。12トレンチ出土である。312は硯片である。小型の硯で、黒色を呈する石材を使用している。



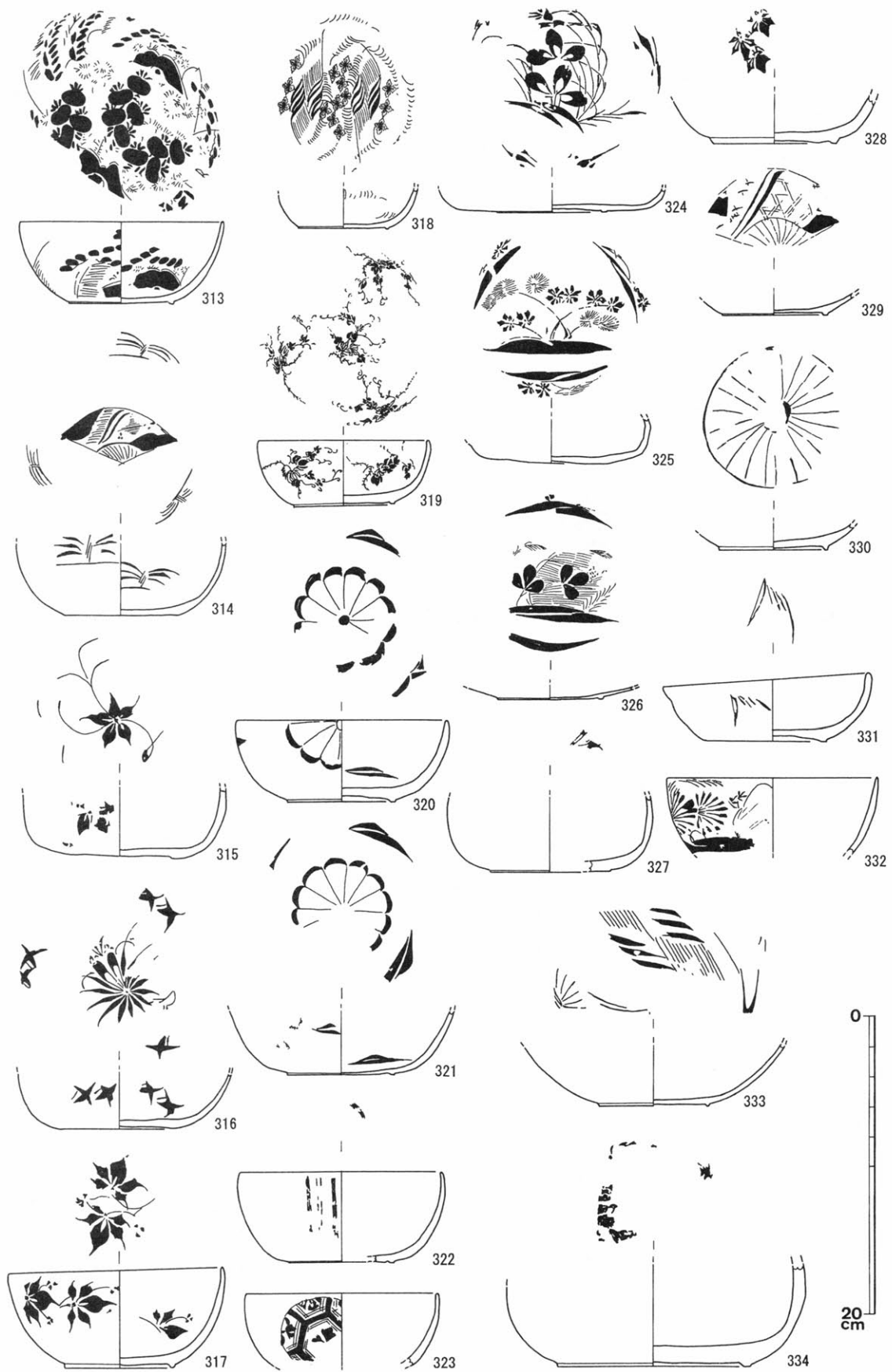
第19図 出土遺物実測図10（石製品）

9トレンチ出土である。

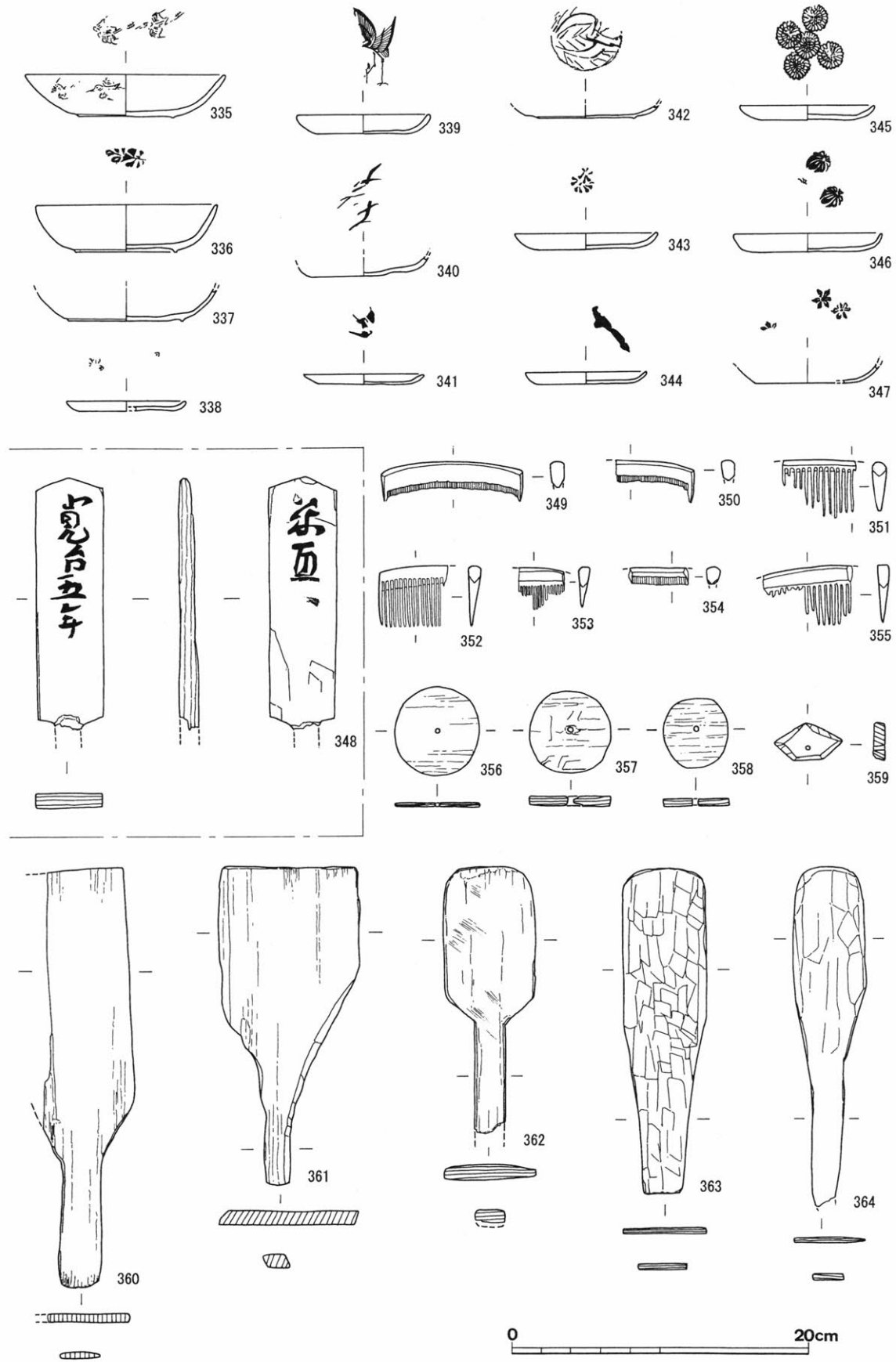
(6) 漆絵漆器

漆器は、9トレンチ西半部およびそれに隣接する12トレンチから出土した。真名井川に近い低地部分にあたる。調査地の土層には、土石流などによって急激に堆積した状況が見られるという指摘もあり、あるいは、扇状地上部の生活域で使用されていたものが流されてきて堆積したものとも考えられよう。伏流水の豊富な土地柄か、残存状態の良好な漆絵漆器が多数出土した。器種としては椀と皿で、鉢とみられる大型のものも含まれる。いずれも黒漆塗りの上に朱漆で施文する。文様は、花鳥文が主体で、扇面文などもみられる。

313～333は椀である。313は内面に橋文中心に草花文を描く。外面にも草花文を描く。変形しているが、口径13.6cm、器高5.5cmとみられる。314は扇面文と草文、315は花文、316は花鳥文を内外面に描く。317は花文を内外面に描く。口径14.4cm、器高6.7cmを測る。318は抽象化された草花文を内面に描く。筆致は繊細である。なお、花菱形の花文は、朱漆ではなく錆漆のような色調であり、手書きではなく印判によって施文される。319は残存状況が最も良好なもので、口径11.5cm、器高4.4cmを測る。蔦とみられる蔓草文を内外面に描く。320、321は菊花文を描く。322、327は朱漆が残るが文様は不明である。323は破片であるが、亀甲繫文が描かれる。324～326は重ねたまま土圧で押しつぶされた状態で出土した。草花文を描く。328は見込みに花文を描くが、印判による施文とみられる。329は扇面文、330は菊花文、331は草文を描く。332は破片であるが、



第20図 出土遺物実測図11 (漆器)



第21図 出土遺物実測図12 (漆器、木筒、木製品)

外面に菊薄文を描き、内面は朱漆塗りである。333は草文を描く。334は大型の厚手の器種で鉢とみられる。見込みに朱漆が四角状に残るが、文様は不明である。

335～347は皿である。335は口径13.5cm、器高2.9cmを測る。内外面に双鶴文を描く。336は口径12.3cm、器高3.1cmを測り、内面に葉文を描く。337は朱漆の痕跡がみられない。339は内面に鶴文を描く小形の皿である。340は落雁文、341は花文、342は葉文もしくは雑な鶴丸文を描く。343は小さい花文を内面に描く。345は口径9cm、器高1cmを測る。内面に5個の菊花文を印判で施す。346、347は内面に花文を印判で施す。338、344は文様不明である。

これらの漆絵漆器の年代については、平成18年度の調査では伴出する土器等がなかったため、明確ではなかった。平成19年度の調査で、土師器皿等の土器とほぼ同一地点から出土するものがあつたため、その土器から13世紀後半頃という年代が推定できるようになった。これに先立ち、平成18年度出土の漆器の理化学的保存処理を行った時に、放射性炭素年代測定と木地の樹種同定を行った。その年代測定でも13世紀後半の年代値が示された。また、木地の樹種は櫟であることが判明した。

(7)木簡

木簡348は、12～13世紀頃の遺構と考えられる柵列S A146を構成する柱穴の内、北端に位置する柱穴の埋土中から出土した。この木簡は、題籤軸とみられる。題籤軸は、書類などを巻きつけた巻物の軸であり、先端部に書類の内容を書いた札状の見出しが付く形状のものである。本品は、軸部を欠失し、見出しの札状部分だけが残存する。残存長8.2cm、幅2.1cm、厚さ0.4～0.6cmを測る。軸部側が厚い。

この木簡の片面には、「寛治五年」(1091)の年号が墨書される。もう片面には2ないし3文字が墨書されている様子であるが、かなり薄れており判読できない。上部の文字は「米」と判読することも可能である。その次の文字は、現状では不明である。さらに、数字のような文字が書かれていた可能性も考えられる。

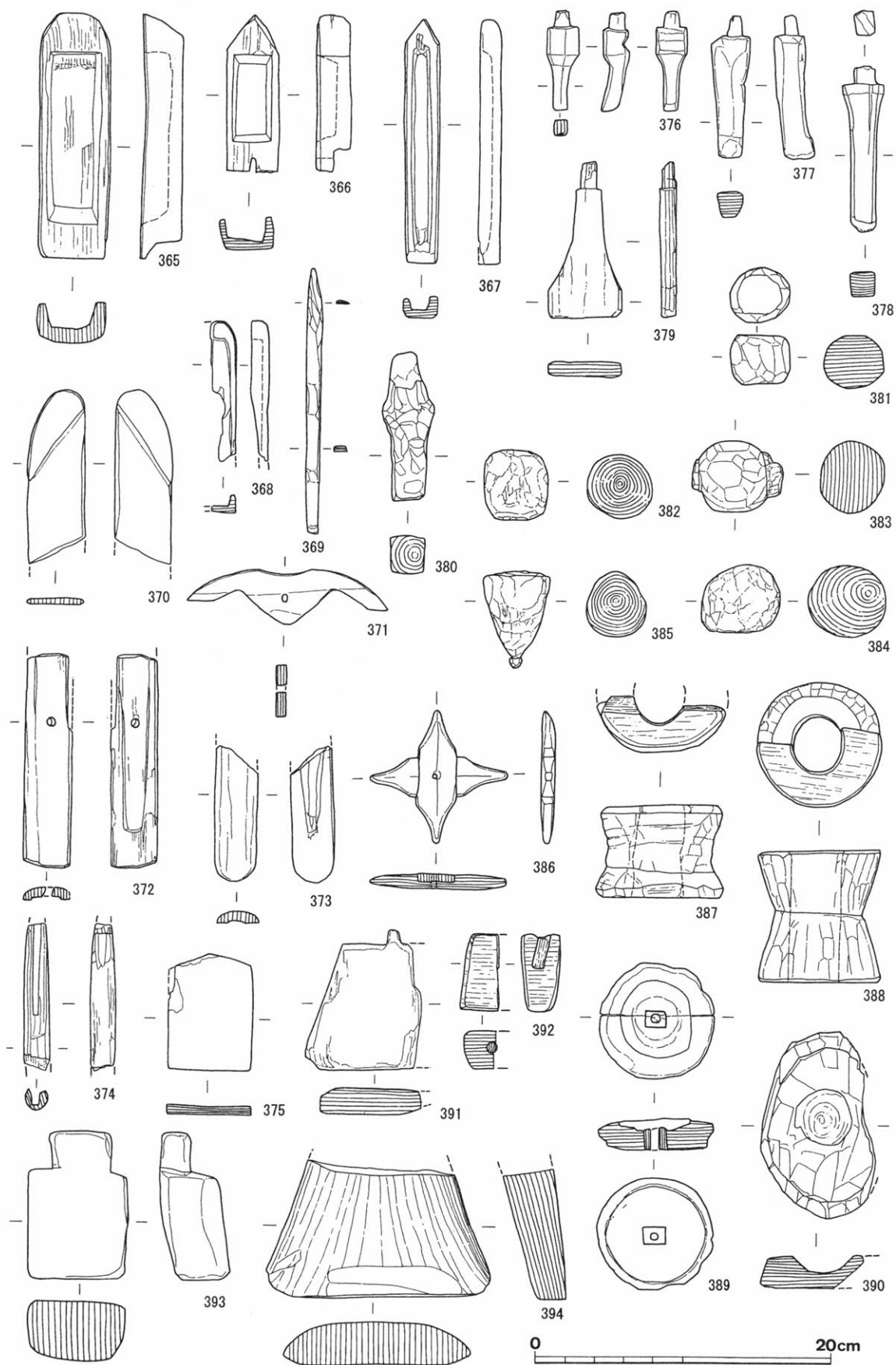
(引原茂治)

(8)木製品

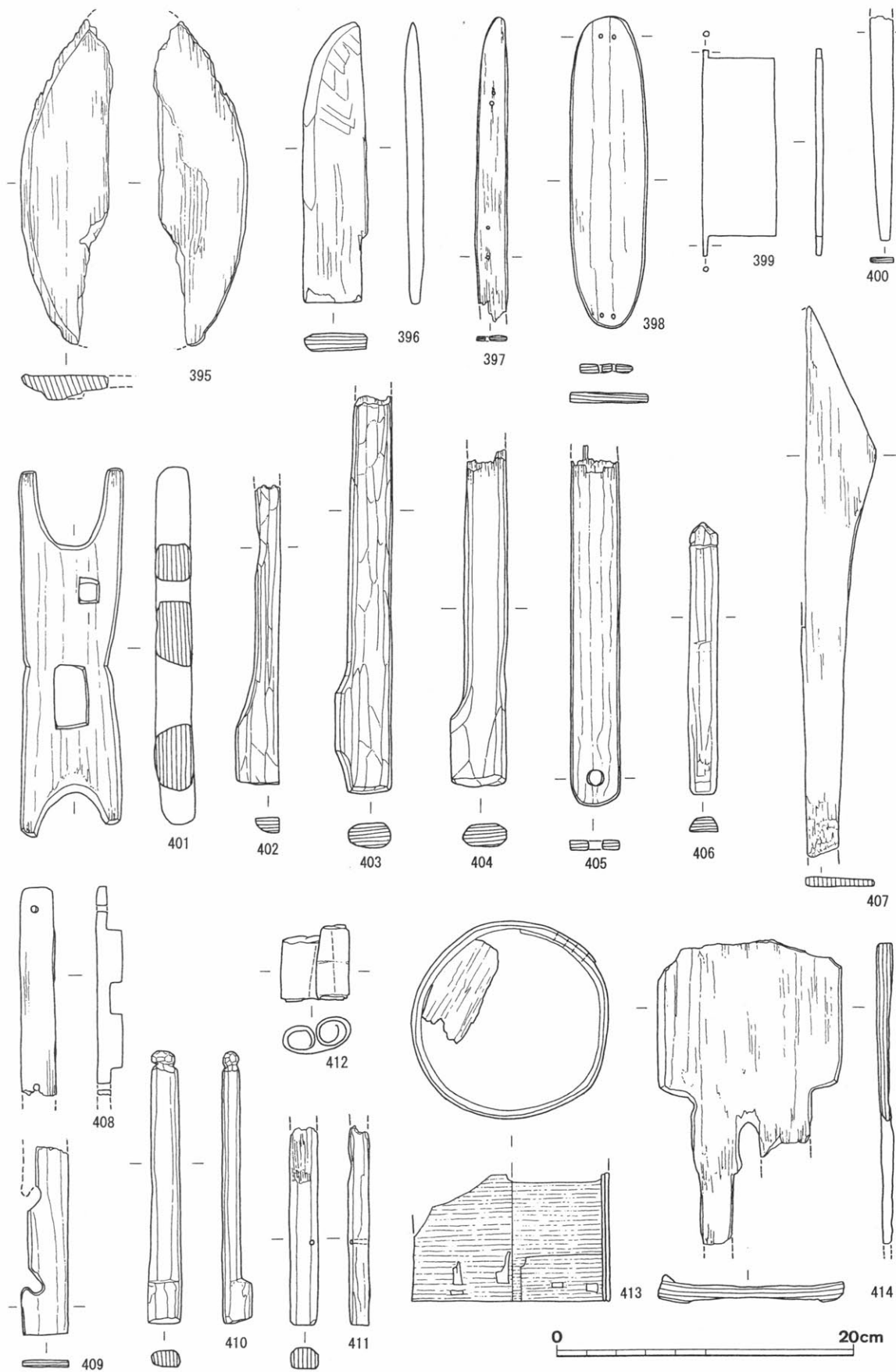
今回報告する木製品は、ほとんどが9トレンチ出土のもので、下駄427、428のみ12トレンチ出土のものである。

349～355は横櫛である。351は歯の間隔が広い。356～358は中央に小円孔を穿った円盤である。356は最大径5.9cm、厚さ0.3cmを測る。359は厚さ5mmの板に孔を穿ち、外面を五角形状に面取りしている。転用品と推測される。用途不明である。360は羽子板状製品である。長さ28.4cmを測る。361は羽子板または杓子の未加工品と推定される。362は先端を題籤状に加工した杓子である。363は表面を丁寧に加工した杓子である。長さ21.4cm、幅5.6cm、厚さ0.4cmを測る。364もやや細身の杓子である。

365～367は舟形木製品である。365は長さ16.7cm、幅4.8cm、厚さ2.6cmを測る。368も一部分が欠けるが舟形木製品と推定される。370は厚さ0.5cmの扁平な板に亀頭を表現した陽物形木製品で



第22図 出土遺物実測図13 (木製品)



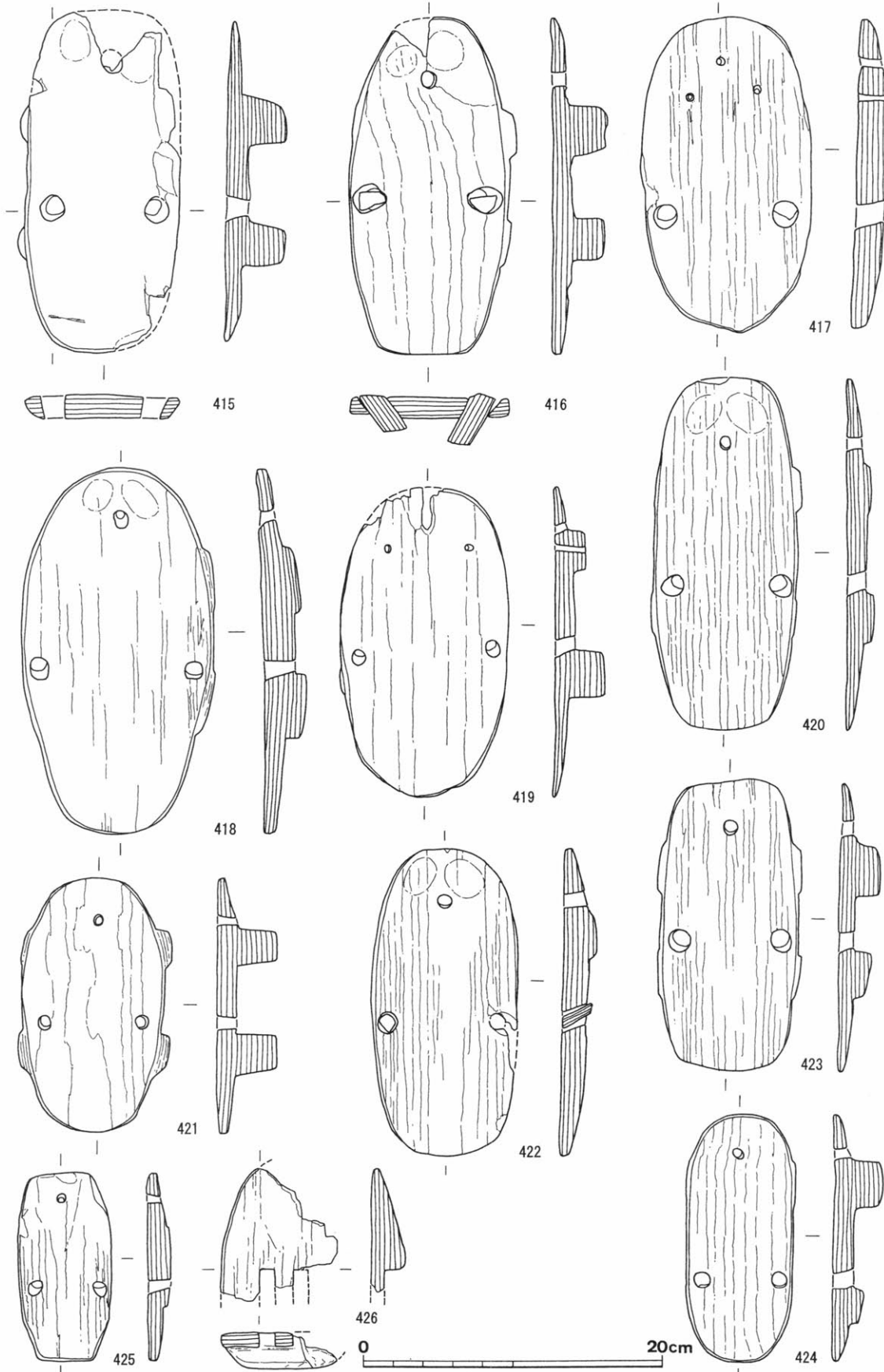
第23図 出土遺物実測図14 (木製品)

ある。369は一端を尖らせた刀子形木製品と推測される。371は左右の両端が欠損するがカイト状に加工した板に小円孔を穿つものである。形代または部材と推定されるが用途不明である。372は中央に中柄を埋める溝を抉った板材に目釘孔が穿たれた、小刀ないし刀子の柄である。長さ14.4cm、幅3.2cm、最大厚さ1.1cmを測る。373も同様な柄である。374は円筒状に加工した部材の片側から貫通しない方形の孔を穿ったもので、千枚通しまたは錐の柄であろう。375は板材の片側を圭頭に加工した将棋の駒に似たもので、用途不明である。376は方形状の部材の上端にホゾを作り出し、反対側に緩やかに曲がる脚を作る。外面に黒漆が塗られた入れ物容器の脚と推定される。長さ6.6cm、幅2.2cmを測る。377も方形状の部材の上端にホゾを作り出し、反対側を猫足状にする。箱または盤の脚と推定される。長さ9.6cmを測る。378は方形状の部材の上端にホゾを作り出し、反対側に面取りした長めの脚を作る。長さ11.2cmを測る。379は板状の部材を台形状に加工し、先端にホゾを作り出す。机または箱の脚と推定される。380は円形状の部材の上端にホゾ状に作り出し、反対側を方形に加工する。入れ物の脚と推定される。

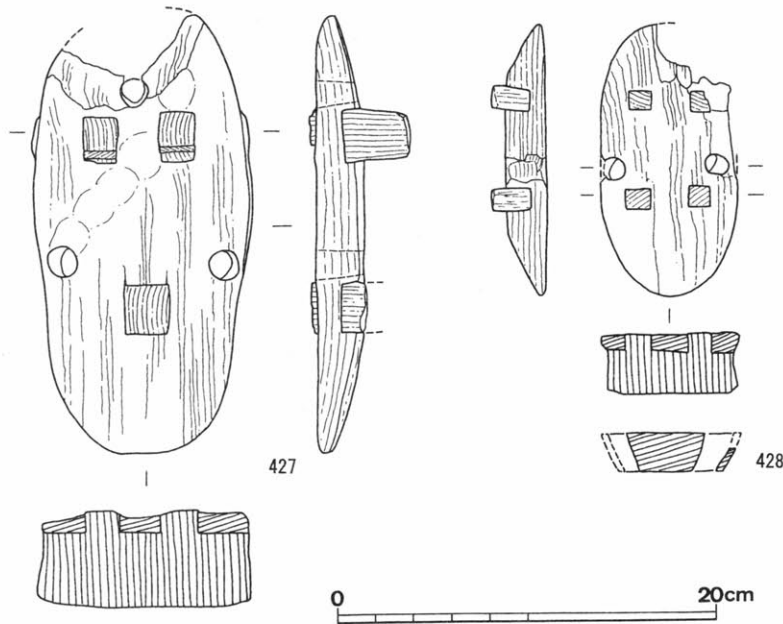
381～384は打球である。383には連続加工したときの切り離し痕跡が残る。385は下端に芯を作り出した独楽である。386は板材を十文字に組み合わせ中央に小孔を穿った糸車の支柱である。387・388は木錘状に加工した部材に貫通する円孔を空けた、何らかの軸受けと推定される。388は高さ9cm、最大径8.4cm、内孔径3.4cmを測る。389は板材の中央に方形の部材を詰め込み、その中央に小円孔を穿つ。上面から削り込まれた痕跡をとどめ、底面を円高台状に削り出す。燈台の可能性もあるが用途不明である。390は板材の中央部を円形に削りこんだ、用途不明品である。

395は破損が著しい盆である。396は折敷または曲げ物の板と推定されるが、一部が両刃状に加工されているので、形代の可能性もある。397は折敷の底板で、2か所に小円孔がみられる。398は細長い小判型の板材で、上下2か所に並行する小円孔が穿つ。用途不明である。長さ21cm、幅5.3cm、厚さ0.7cmを測る。399は板材の片側の上下に円形ホゾを作り出したもので、箱型容器の観音開きの扉の可能性が高い。最大長13.8cm、幅4.9cm、厚さ0.4cmを測る。400は板材の一端を緩く尖らせたもので、用途不明である。401は厚い板材の中央部を縊れさせ、二か所に方形の孔を穿ち、両端にU字状の削り込みがある、用途不明である。長さ24.7cm、幅6.8cm、厚さ2.6cmを測る。

402は両端を欠損するが棒状から板状に加工したもので、鎌類の柄の可能性もある。403は片端を欠くが表面を丁寧に加工した鎌の柄である。長さ26.8cm、最大幅3.9cm、厚さ1.7cmを測る。404も片端を欠くが表面を丁寧に加工した鎌の柄である。長さ22.7cm、最大幅3.7cm、厚さ1.5cmを測る。405は片端に円孔を穿つ何らかの柄と推定される板材である。長さ24.2cm、最大幅3.3cm、厚さ0.6cmを測る。406は片端に浅い切り込みがある、割れた棒状品である。刀子などの柄の未成品と推定されるが、用途不明である。407は片端を山状に加工した板材で、用途不明である。長さ37cm、最大幅4.6cm、厚さ0.6cmを測る。408は側面が連歯下駄のような板材で、両端に小円穴を穿つ。用途不明である。長さ14cm、最大幅2.3cm、厚さ1.6cmを測る。409は片面に「ハ」字状の削り込みがある板材で、用途不明である。410は片側を乳頭に加工し、反対側を厚く残したも



第24図 出土遺物実測図15 (木製品)



第25図 出土遺物実測図16 (木製品)

ので、用途不明である。長さ18.5cm、最大幅2.2cm、厚さ1.2cm(最大厚さ2cm)を測る。411は面取りした棒状で小円孔がある、刀子などの柄の未成品の可能性があるが用途不明である。長さ13.6cm、幅1.9cm、厚さ1.5cmを測る。412は樺皮である。413は底板がほぼ欠損した曲げ物である。口径13.3cm、残存高8.9cmを測る。414は中央部と左右に刳り込みがある板材で、用途不明であ

る。残存長20.6cm、幅12.5cmを測る。

391は板材の上面にホゾを作り出し、側面を斜めに加工したもので、差し歯下駄の歯の可能性が高い。392は方形部材の上面から円形留め木が打ち込まれたもので、差し歯下駄の歯の可能性が高い。393はそりを持つ方形部材の上面を長方形のホゾ状に加工したもので、差し歯下駄の歯の可能性が高い。394は上部を欠損するが外面を丁寧に面取りしたもので、差し歯下駄の歯と推測される。415～425は連歯下駄である。前端に指痕が明瞭なもの(416・418・420・422)、前端に複数の小円孔を穿つもの(417・419)、鼻緒を留めた部材が打ち込まれたもの(416・422)などがある。416は長さ22.5cm、幅11.3cm、高さ3.6cm、418は長さ24.5cm、幅12.9cm、高さ2.8cm、421は長さ17cm、幅9.6cm、高さ4cmを測る。425は中央部に厚い歯を一枚削りだした下駄である。長さ12.9cm、幅6.3cm、厚さ1.6cmを測り、小人用と推定される。426は差し歯下駄と推測される。完形に近い差し歯下駄である。427は前歯を2か所のホゾで連結し、後歯を1か所のホゾで連結している。残存長29.9cm、幅11.2cm、高さ(前歯)5.2cmを測る、428は前歯・後歯とも2か所のホゾで連結する。長さ14.2cm、幅7.2cm、高さ3.2cmを測る小人用である。

(石尾政信)

7. まとめ

今回の調査では、また新たな知見があった。それらは、この地域の歴史を考える上で重要な手掛りになると考えられる。列記してまとめとしたい。

9トレンチでは、古墳時代中期の祭祀遺構S X 200を検出した。土器の配列状態が良好に残存しており、祭祀遺構の構成を考える上で重要な資料と言えよう。12トレンチの調査では、調査地付近が陸化して生活に活用できるようになったのが13世紀後半頃で、それ以前は、阿蘇海が入り

込んでおり、海岸もしくは湿地状の場所であったことが確認できた。このような立地条件が考えられることにより、この祭祀遺構が、海の傍に設けられたものである可能性が高くなった。単に水辺の祭りの跡というだけでなく、海上交通の航海安全を祈願するための祭祀遺構という性格も考えられよう。また、付近には古い由来をもつ籠神社もあり、この周辺が、昔から今に到るまで人々の祈りの場所であったことを偲ばせる。

今回の調査では、「寛治五年」(1091)の年号が記された木簡が出土した。この木簡は題籤軸とみられる。宮津市は、丹後国に属し、難波野遺跡は「府中」と呼ばれる地区にある。府中地区には、丹後国分寺跡などが存在し、丹後国府ないしは国庁の存在も想定されている。題籤軸は、官衙関連の遺跡からの出土例が多い遺物であり、調査地付近に何らかの官衙的な施設があったことを想定させる。あるいは丹後国庁に関連する可能性が考えられる遺物として、重要な資料と言えよう。ちなみに、大江匡房の日記である『江記』には、寛治五年に「実信」が14歳で丹後の国守に任じられたことが記されている。実信は藤原氏と考えられている。

中世の遺物としては、漆絵漆器が良好な状態で出土した。これらの漆器は、当時の高級食器類と考えられる。調査地の付近には、「神子屋敷」など付近の籠神社に関係する施設があったことを偲ばせる小字名や、「阿弥陀堂」「荒神垣」などの宗教施設があったことを示す小字名、「大戸」「北垣」などの何らかの居館的なものがあったことを偲ばせる小字名が多く残っている。これらの小字名がいつごろの時期の様子を反映しているのかという問題はあるが、周辺の状況を総合的に考えると、籠神社に係るものという見方もできよう。そのように見ると、これらの漆器は、籠神社に関係する施設で使われていた可能性も考えられる。もし、籠神社関係の場所で使われていたとすると、中世における在地領主としての籠神社の繁栄を物語る資料とも考えられる。

調査地の周辺には、条里制に関係すると考えられている碁盤目状の地割りが見られる。8 B トレンチで見つかった掘立柱建物跡は、ほぼその地割りの方向であるN-30°-W前後の方向に沿っている。一方、9 トレンチ、12 トレンチで検出した掘立柱建物跡や柵列は、ほぼN-10°-W前後の方向に沿っている。難波野遺跡は、真名井川などによって形成された扇状地上に立地している。掘立柱建物跡や柵列の方向は、碁盤目状地割りではなく、扇状地の自然地形に左右されている可能性が考えられる。

この地域の碁盤目状地割りは、扇状地と江尻集落のある砂州状の微高地との間の低地部分に見られる。今回の調査地の状況から、調査地付近が陸化して生活に活用できるようになったのが13世紀後半頃と考えられ、調査地南側の低地部分の陸化はさらにおくれるであろうことが予想される。このような状況から、中世以前にこのような地割りが行われる可能性は少ないと考えられる。

(引原茂治)

注1 以下の方々からご指導、ご教示いただいた。(敬称略)

上田正昭、都出比呂志、石野博信、高橋誠一、増田富士雄、杉原和雄、菱田哲郎、鋤柄俊夫、中畷陽太郎、東高志、奥村清一郎、吹田直子

以下の方々に調査に参加していただいた。(敬称略)

岳崎巖、桜井玲子、坂根宏紀、山本邦男、牧野春生、古林徳江、岳崎伸子、小林美里、神南勝利、下垣節夫、後藤睦子、後藤邦二、黒田良修、大垣允子、早石富佐子、大内紀夫、菅原秀人、齊藤博信、福田豊、後藤房子、尾崎ビルマ、小笠原順子、奥田栄吉、真下春美、小島健之介、岡田代志乃、藤村文美、中村ひろみ、寺尾貴美子、川村真由美、長尾美恵子、久米政代、春日満子

参考文献

「大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

「大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野条里制遺跡平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第111冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004

「大垣遺跡・一の宮遺跡・難波野(条里制)遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

「難波野条里制遺跡・難波野遺跡平成17年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第121冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

『宮津市史』宮津市役所 1996

圖 版



(1) 調査地全景(空撮、北東から)



(2) 調査地全景(空撮、西から)



(1) 難波野 8 A トレンチ全景
(南から)



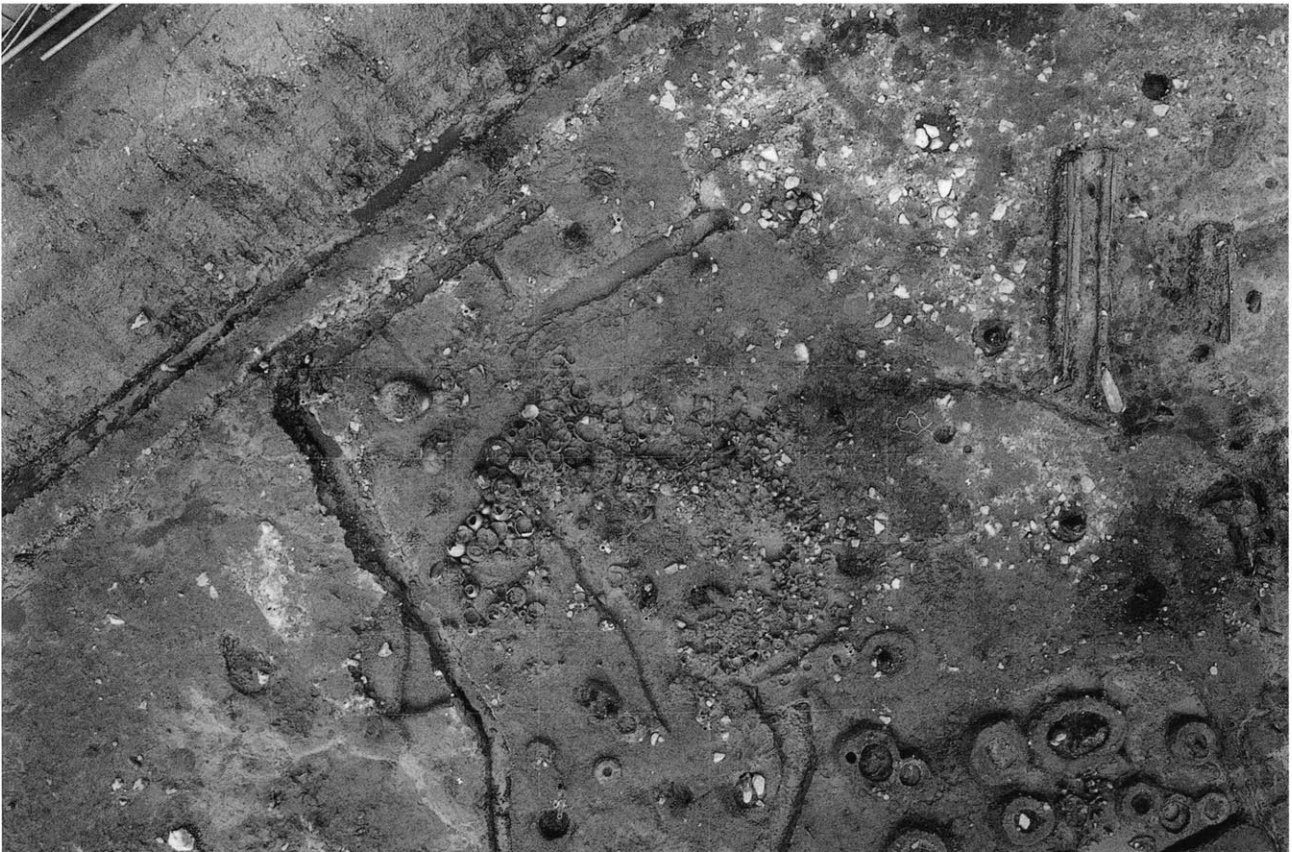
(2) 難波野 8 A トレンチ S E 01
(南西から)



(3) 難波野 8 B トレンチ全景
(南西から)



(1)難波野9トレンチ全景(空撮、右上が北)



(2)難波野9トレンチS X 200(空撮、上が北)



難波野9トレンチS X200(南から)



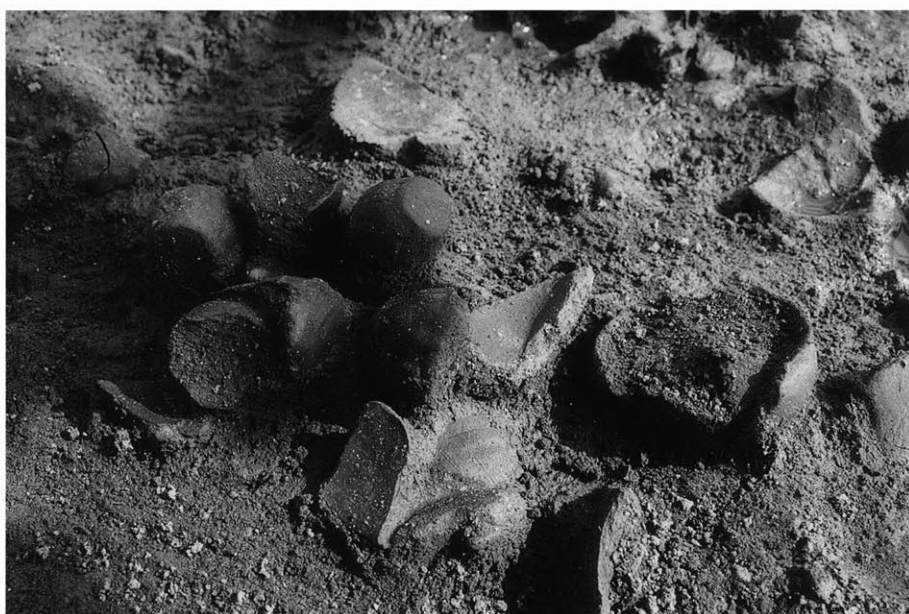
(1) 難波野9 トレンチ S X200(南から)



(2) 難波野9 トレンチ S X200土器出土状況(西から)



(1) 難波野9トレンチS X200
土師器出土状況(南西から)



(2) 難波野9トレンチS X200
手捏ね土器出土状況(南から)



(3) 難波野9トレンチS X200
須恵器出土状況(南から)



(1) 難波野9トレンチSE13・14
(北から)



(2) 難波野9トレンチ
漆器出土状況(東から)



(3) 難波野9トレンチ
漆器出土状況(北西から)



(1) 難波野10トレンチ全景
(東から)



(2) 難波野10トレンチ断面
(南から)



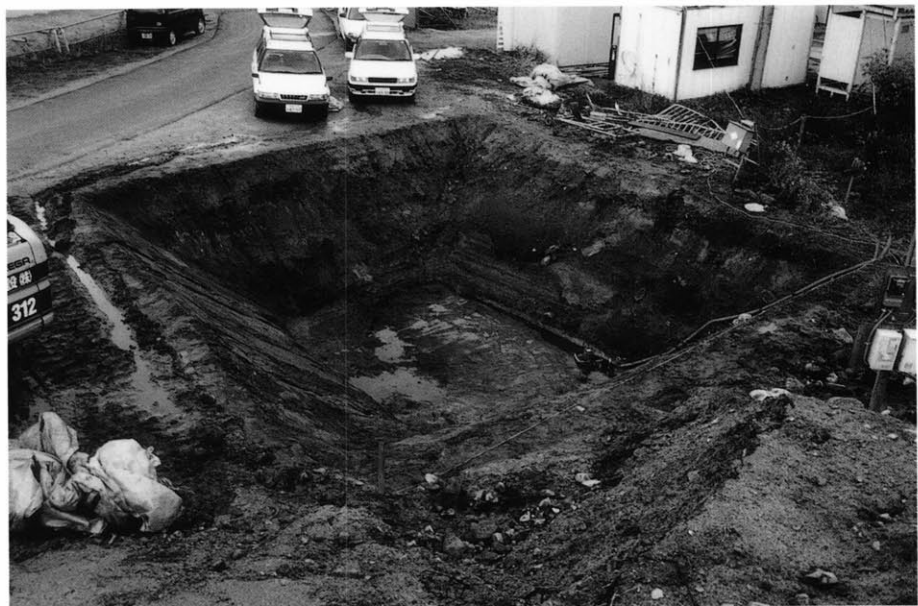
(3) 難波野11トレンチ断面
(南から)



(1)大垣・一の宮4-1トレンチ
全景(南から)



(2)大垣・一の宮4-2トレンチ
全景(西から)



(3)大垣・一の宮4-3トレンチ
全景(北西から)



(1)難波野12トレンチ遠景(空撮、北から)



(2)難波野12トレンチ全景(空撮、下が北)



(1) 難波野12トレンチ東半部(北から)



(2) 難波野12トレンチ西半部(北東から)



(1) 難波野12トレンチ S X01
(北から)



(2) 難波野12トレンチ S E03
(南から)



(3) 難波野12トレンチ S E211
(北から)

(1) 難波野12トレンチ
遺物出土状況(南から)



(2) 難波野12トレンチ
漆器出土状況(西から)



(3) 難波野12トレンチ
漆器出土状況(西から)





2



30



25



8



31



12



32



16



29



19



40



30



47



21



28



54



62



57



60



84



95

89

87



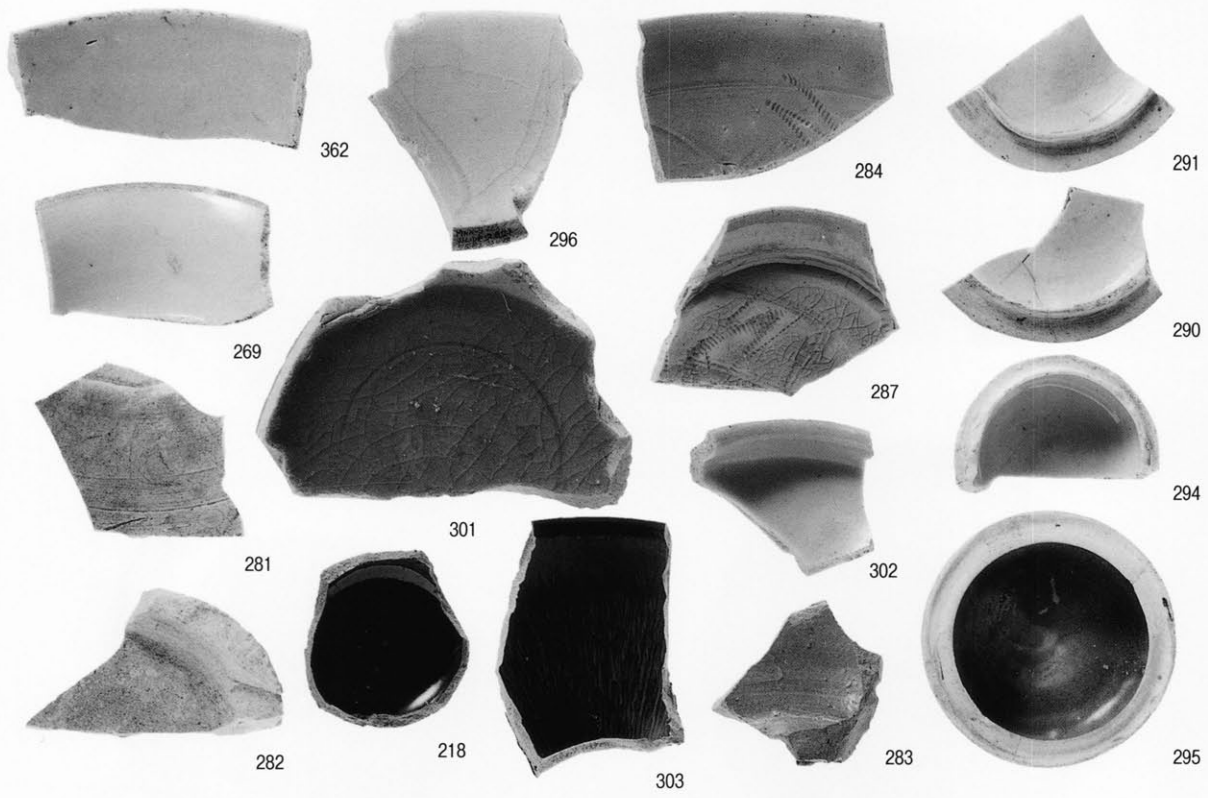
80



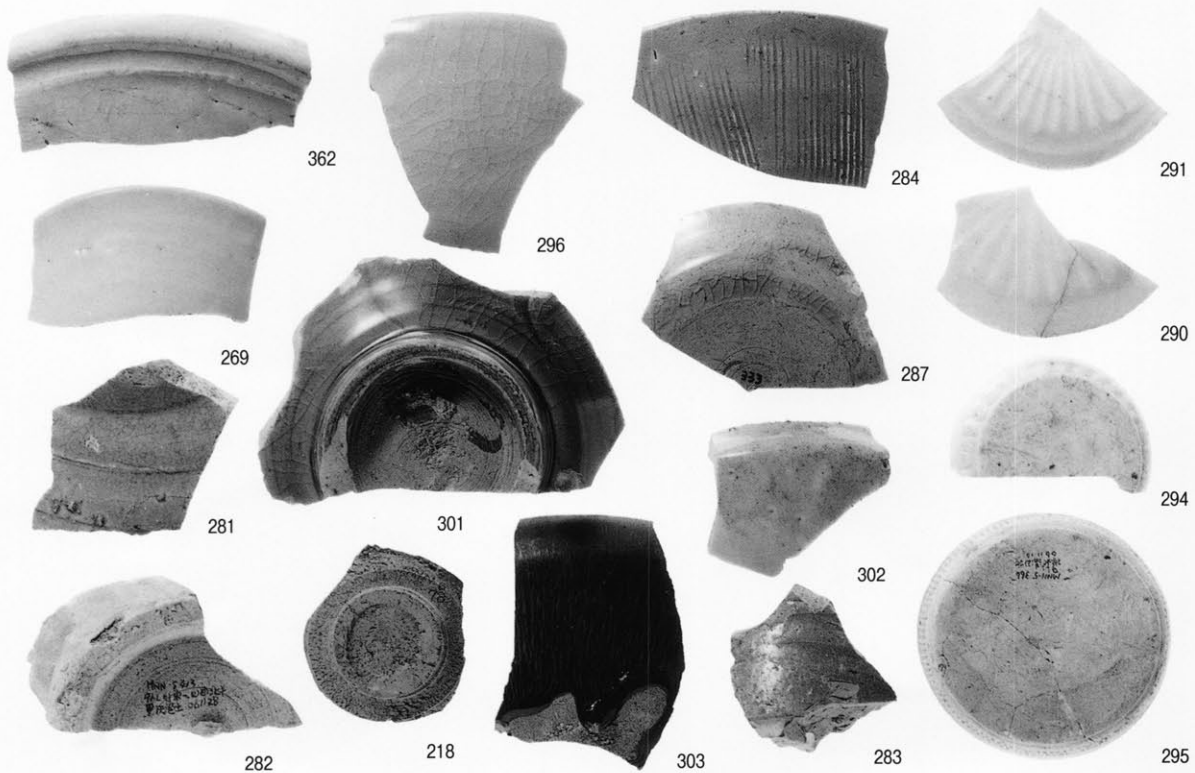
104



105



(1) 出土遺物 4 (中国製陶磁器、内面)



(2) 出土遺物 4 (中国製陶磁器、外面)



313



318



315



335



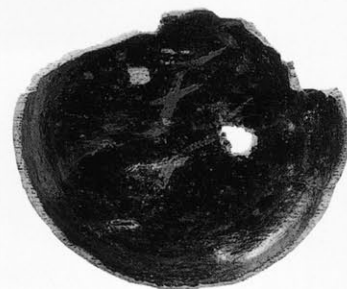
315



314



345



340



345



317



319



317



319



331



324



331



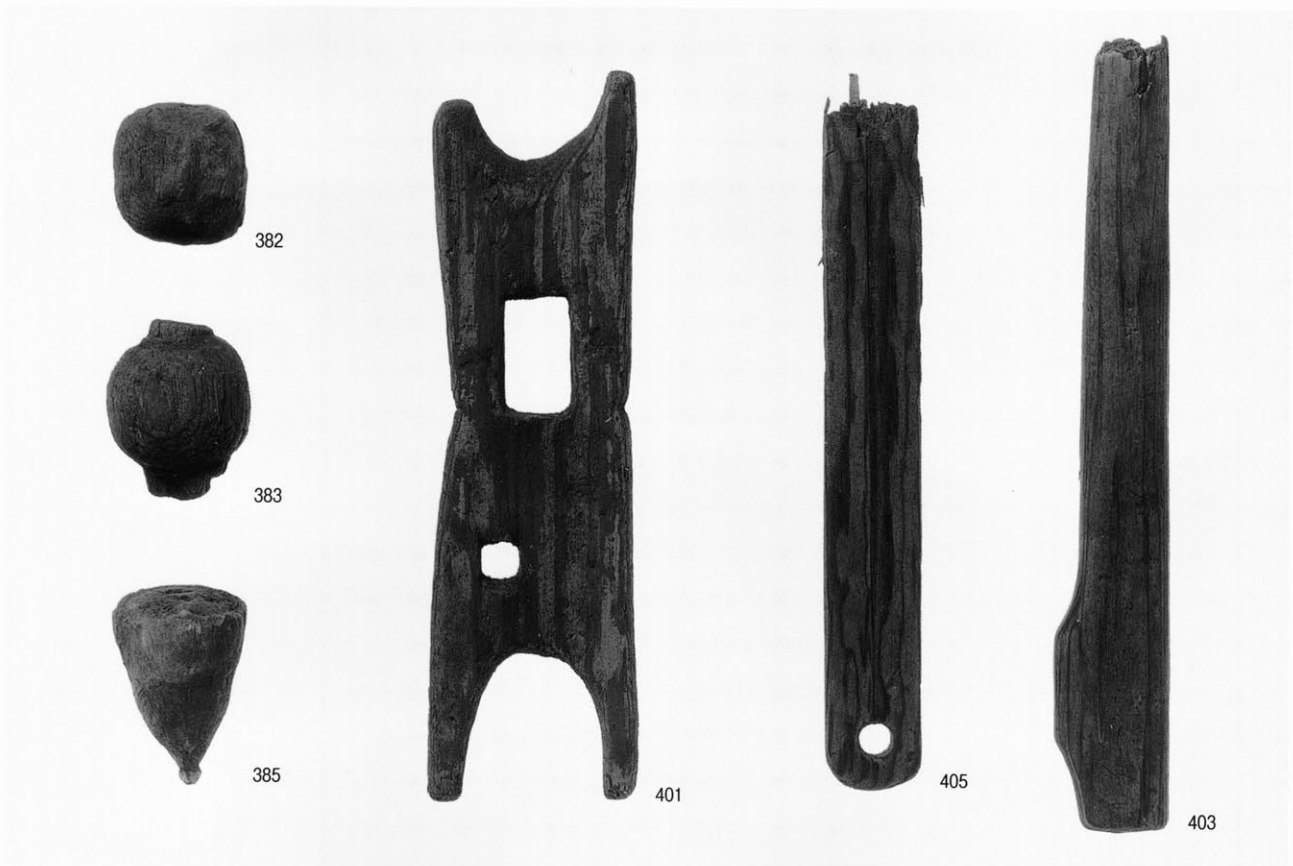
325



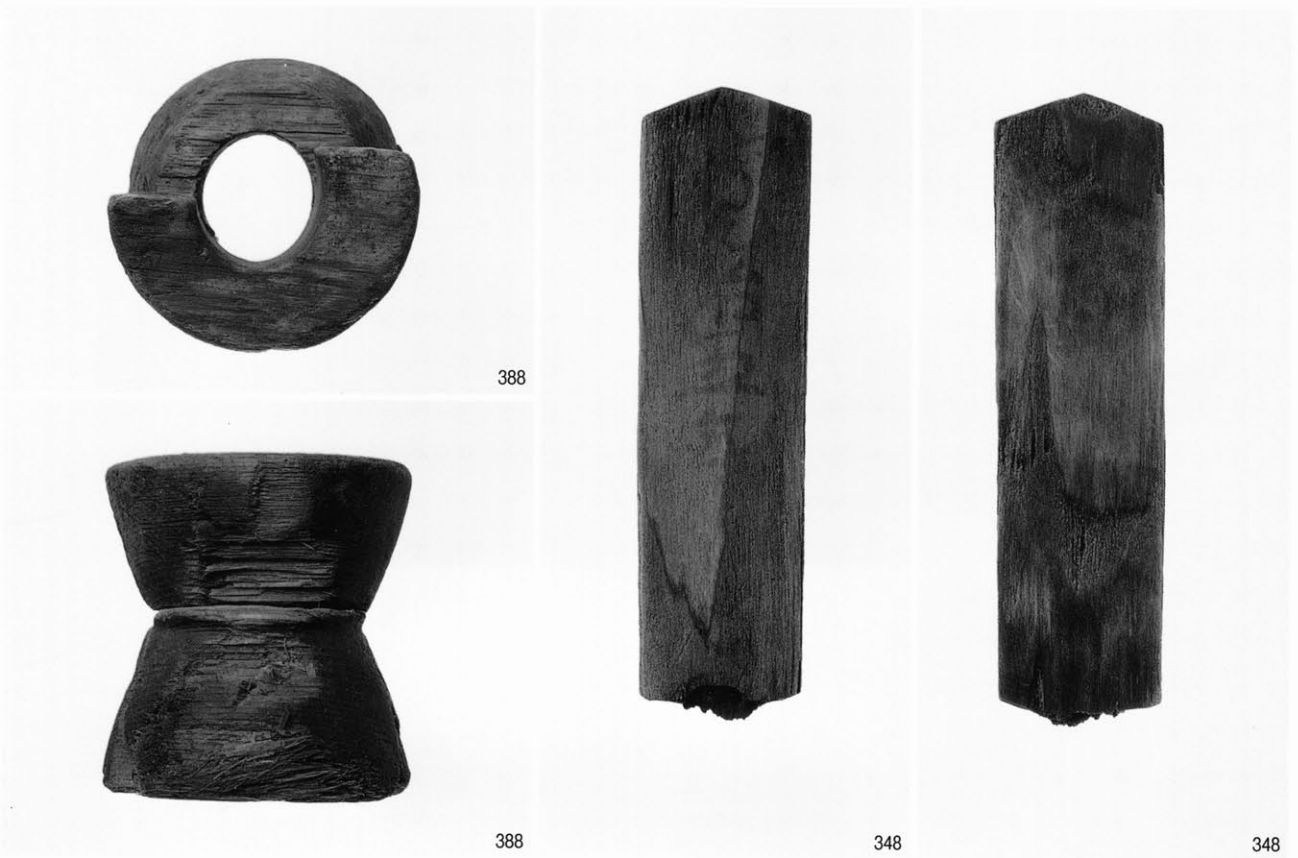
339



347



(1) 出土遺物 7 (木製品)



(2) 出土遺物 8 (木筒、木製品)



360



361



363



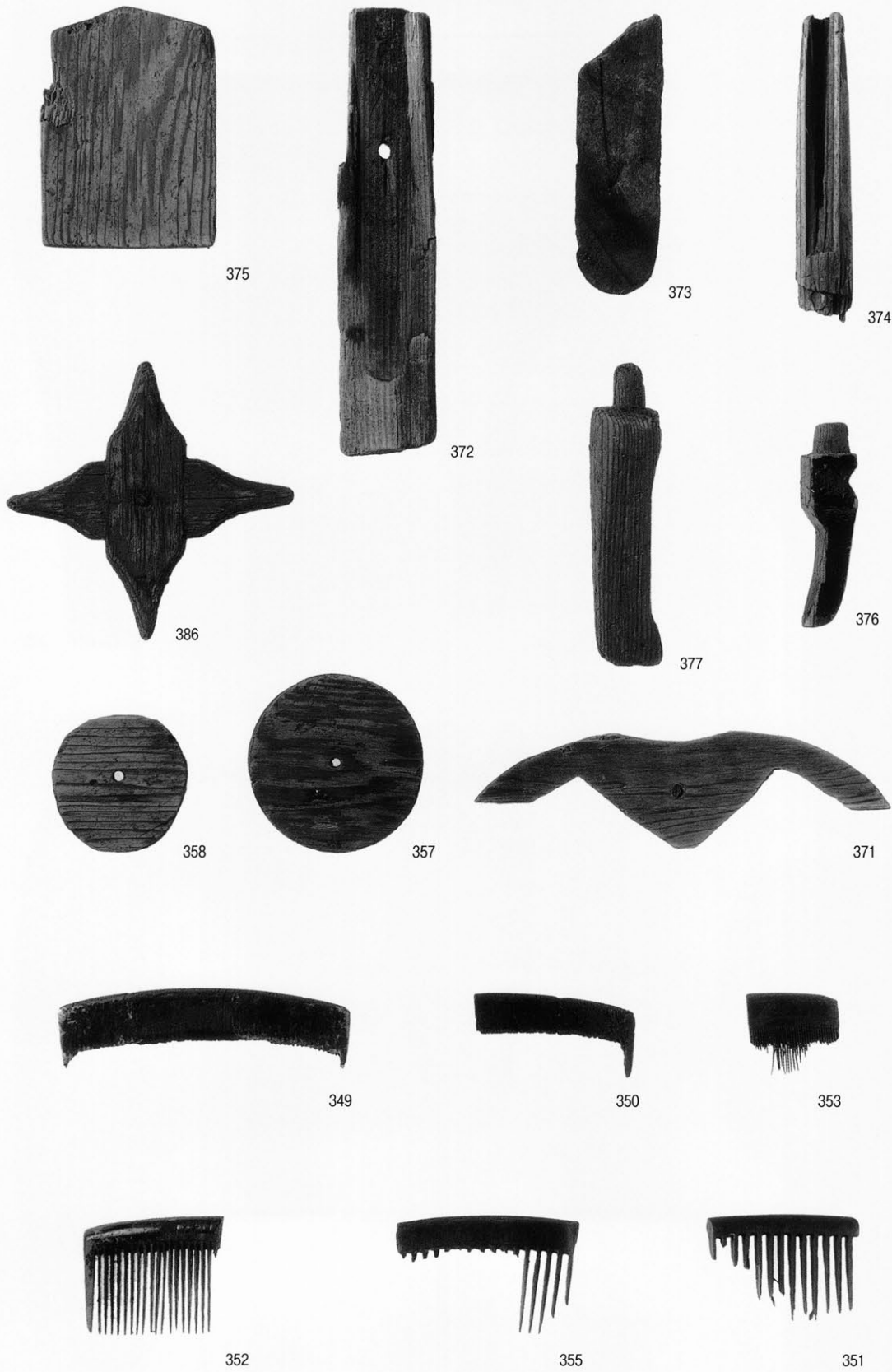
362



364



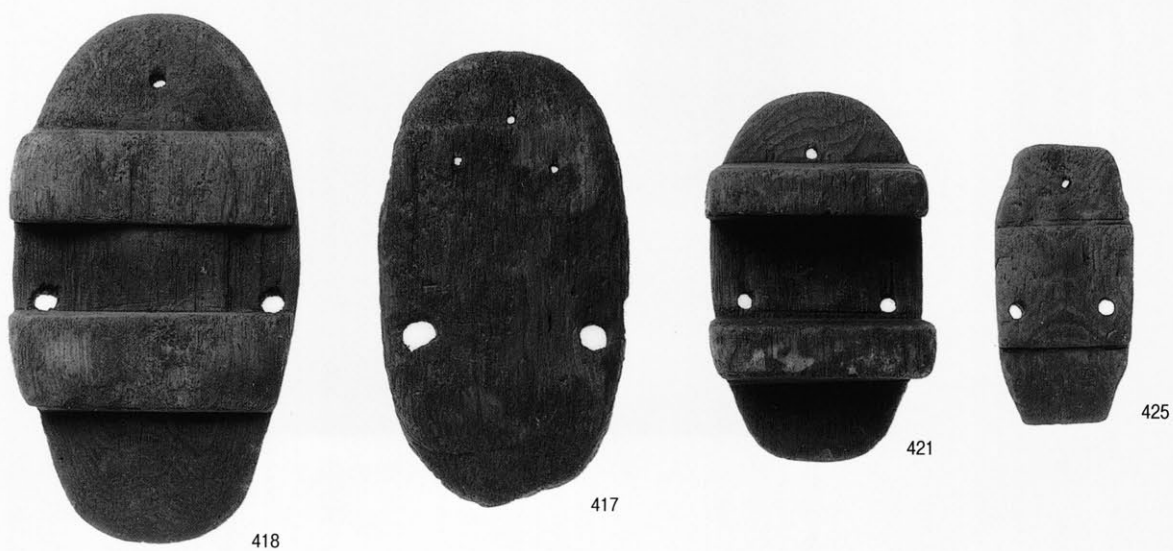
398







(1) 出土遺物12(木製品、上面)



(2) 出土遺物12(木製品、下面)